

「新しい学校づくり」をめざして～開かれた学校、今、学校に求められるもの～

学習意欲について

福島県教育センター所長 青木 崇郎…… 1

発信 ～センターは 今～

- 2004ふくしまの教育の現状を分析 教育センター教育調査チーム…………… 5
 学校経営・運営に資する外部評価等の在り方に関する実証的研究
 教育センター学校評価研究チーム…………… 6
 子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発
 教育センターカリキュラム研究チーム…………… 8
 授業でITを生かすために ～情報化推進研究チームの取り組み～
 教育センター情報化推進研究チーム…………… 10
 「実践学校教育相談」言いたいけど、言えない？
 ～望ましいコミュニケーション能力の育成に関する指導援助～
 教育センター教育相談チーム…………… 12
 スキルアップのために講座テキストの活用を!! 教育センター情報教育チーム…………… 16

長研究生だより

- 貴い「瞬間」を振り返って 棚倉町立棚倉小学校 教諭 薄葉 征子…………… 17

研修の風景

- 基本研修～平成16年度初任者研修宿泊研修から～
 教育センター企画振興チーム…………… 18

特集

- 平成15年度福島県教育研究発表大会から
 講演「これからの社会、これからの教育」 東京大学名誉教授 養老 孟司…………… 20

人・道・歩み

- 初めて出会う山野草に心ときめかす 加藤山野草園 加藤ハルイ氏に聞く…………… 30

随想

- 美術教育の今 現在 パリ～福島～東京
 教育センター教科教育チーム 片平 仁…………… 31

豊かな教育実践

- ITを活用した総合単元的な道德の授業の試み
 ～「少年Aについて考えよう」の実践を通して～
 国見町立大木戸小学校 教諭 吉田 聡…………… 32

授業に生きる資料

- 様々な学校で活用できる電気伝導性確認装置の製作と活用
 教育センター教科教育チーム…………… 34

お知らせ

- 実践に役立つ教育資料～最近の研究紀要・資料から～ …………… 36
 教育図書・研究資料のご案内



「新しい学校づくり」をめざして

～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

学習意欲について

県教育センター 所長

青木 崇 郎

1 はじめに

近年、大学生まで含めたさまざまな意味での「学力低下」が論じられておりますが、県内の各学校ではこの論議の以前から「学力向上」を常に大きな目標として掲げてきました。現在も「特色ある学校づくり」の中で、学科や地域の特性などに応じたカリキュラム編成とか地域や保護者との連携強化などさまざまな角度から「学力向上」に取り組んでおります。

それらの「学力向上」の取り組みの中で核になるのは、どの学校でも「授業の充実」や「授業の改善」であることは論を待たないでしょう。校種や学年、そして学級の形態などが異なっても、やはり授業が「学力向上」の取り組みの最大の活動の場です。

2 学習意欲低下の現状

では、その授業に対する児童生徒の意識や意欲はどうでしょうか。平成15年度に県教育センターが行った小・中・高生とその保護者約5,000件におよぶ『ふくしまの学習意識に関する調査』の中の「学校の授業に対する意識」の項目に対して、小・中学生は『教室外の体験学習が楽しい』が断然トップでしたが、気になるのは『分からないので楽しくない』と答えた割合が小14%・中27%・高43%（トップ）と、校種別の授業形態の変化にもよるでしょうが順次増加していることです。さらに「授業内容が分からないときの対応」については、各校種とも『友達に聞く』が一番多かったのですが、ここでも懸念されるのは『そのままにしておく』と答えた割合が小・中約13%・高22%と

じわじわと増えていることです。また家庭での学習時間の少なさも含めて、文部科学省や民間の調査で指摘されている全国的な学習意欲低下傾向は、本県においても同様に見られると言えるのです。教育改革の流れの中で「学力向上」についてもさまざまな取り組みが行われているのですが、肝心の子どもたちの学習意欲が高まらなければ折角の取り組みが画餅に帰してしまうこととなります。

では、子どもたちが意欲的に学習し、生き生きとした表情で授業に臨むようにするにはどうすべきでしょうか。子どもたちが先生に指名してもらおうと腰を浮かさんばかりに高く挙手するときのあの輝く瞳や、友の発表した意見に触発されて新たな発想が浮かんだときに顔に満ちあふれた嬉しさや、沈黙考する深いまなざしが一転して難問を征服した喜びに変わる一瞬のきらめきなどに満ちた授業を作るにはどうすればよいのでしょうか…。今まで国や県、そして学校が行ってきた取り組みのいわば最後の砦は、やはり一人一人の教員の力、充実した授業を創造する力であると思います。

学級の子どもたち全員の学習意欲を喚起していくことはとても困難な事業なのですが、本文がその取り組みの参考となることを願う次第です。この後の内容としては、まず学習意欲が低下してきた背景と対策などを多角的に確認し、次にそれを踏まえて、これからの実践の参考となるような2冊の本を紹介したいと思います。

3 学習意欲低下の背景と対策

学習意欲低下の背景や原因については、歴史的な視点などさまざまな角度からの、そしていろいろ

「新しい学校づくり」をめざして ————— ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

るな立場による見方があります。それぞれの問題認識の立場に応じてとられた対策などと合わせて概観していきたいと思います。

(1) 「教育荒廃」と文部科学省

かつて高校進学率が90%を越えた1970年代頃から、「画一的な教育」とか「偏差値序列体制」が子どもたちの学習意欲を奪い、校内暴力やいじめ、そして不登校などの「教育荒廃」的状况を引き起こしているのだ、という世論の高まりがありました。また後には授業内容の理解度が小中高でそれぞれ「7・5・3」割しかない、という非難も出ました。

それらの批判に対して国では1970年代後半から「ゆとりある学校生活」と「基礎的・基本的な内容の重視」などの方針を学習指導要領に示して学習意欲の回復につとめました。さらに80年代末の学習指導要領改訂では「知識・理解」と同様に「意欲や関心」も重視する「新しい学力観」が示され、「自ら学ぶ意欲」が重視されました。そして前回98年の改訂で「生きる力」や「ゆとり」が重視され、「総合的な学習の時間」が創設されたことはご承知のとおりです。国全体の教育はよく巨艦に比せられます。一度の改訂の効果はすぐに測られるものではない訳ですが、着実に子どもの意欲を重視する方向に変わってきていることが分かります。

(2) 圧縮された近代化の終わりによる意欲の低下

こうした学校教育の動きとは別個に、もっと大きな日本の近代化という視点からも学習意欲の変化が説明されます。近代日本の急激な成長を歴史的に見れば、欧米が2世紀かかった近代化を1世紀で成し遂げた、東アジア型の「圧縮された近代」と言えるものです。その成長が続く間は、学校教育により親よりも高い社会的地位を得ることが可能であったため学校への信頼も高かったのですが、「近代」が終焉を迎えて出世などによる「社会移動」の流動性が止まったとき、子どもたちの学習意欲も衰退する、という見方です。また日本が明

治以来の目標であった先進諸国に追いついたために社会全体が目標喪失の虚脱感に陥り、子どもたちも将来の確たる目標を持ってないまま学習意欲が衰弱したとも見られています。

(3) 成熟化社会の価値観の多様化による意欲の低下

また社会的な変化という視点からも解釈がされます。近代化の終わりとともに先進諸国は成熟社会の段階に入り、価値観の多様化・個人化を経験します。それまでサブカルチャーとされていたものを生きがいとするなど多様な価値観を持つようになっていた若い世代にとって、社会的地位の上昇とかそのための学校教育という手段は絶対的な価値を持つものではなく、学習意欲も低下しました。

この(2)と(3)のような困難な状況を打開するために今回の「新しい学力観」を基礎とした学校教育—自らの生き方について自力で考え、自分なりのしっかりとした目標を立てて、その目標の達成に向けて、この複雑で困難な時代をたくましく生き抜く力を育てる—が行われている訳です。しかし、最終的に望まれる「生きる力」が非常に大きくて抽象的なものですから、学年毎の系統性をもって計画的かつ具体的に指導することが必要になると考えられます。

(4) 少子化による意欲の低下

① 少子化により受験競争が緩和されてきたことにより、進路や受験という外発的な動機付けの力が弱くなったために子どもたちの学習意欲が低下したという見方があります。そのために子どもたち自身の内発的な動機付けによる、意欲や関心を重視した学習が求められる訳です。

② 少子化とは豊かな社会の必然的な傾向であり、親たちは義務教育段階から子供の専門的能力に集中的に投資し、画一的な教育を望まないようになるという見方があります。そこで塾等の学校外教育が盛んになり、授業への意欲低下の原因となります。

i 授業の内容が、塾等で先行学習したもので

「新しい学校づくり」をめざして ————— ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

あり、かつ塾の受験指導的内容よりも易しいことが多いので授業への意欲を失うという形で現れる時があります。

- ii 比較的優秀な子どもたちの間でも、近年の一部の受験教育の浅薄さに嫌気がさして勉強への意欲が低下するという形もあります。つまり教科書の指導内容量が以前より減少し、入試問題に難問奇問も少なくなったために、受験勉強が、暗記可能な程度の量に収まる重要部を、トレーニング学習で定着するテクニックの磨き上げに傾いてしまいます。そのため成就感のない、本格的な勉強の喜びとは程遠いものでしかなくなるというものです。対策としては、本当の勉強の喜びが味わえる授業を行って、学習全体への信頼回復を図らなければなりません。

(5) 社会階層間格差拡大による意欲の低下

低社会層の若者の学力上の競争における戦線離脱や意欲低下は以前から指摘されていましたが、今回のいわゆる「ゆとり改革」でも、そのねらいとする内発的な学習動機付けが表面的なものに終わってしまうと、特に家庭の教育力が低い社会層では、子どもの学習意欲低下に歯止めが効かず、競争から「降りる」方に自己肯定感をもつようになってしまうという見方があります。これに対しては、まず内発的な学習動機付けが、本当に子どもたちの心の深部に錘鉛を下ろしたものであるような努力をする一方、教員が児童生徒の個人理解を深め、家庭学習などで家庭との連携を深めるだけでなく、時には保護者に現状認識を深めてもらう努力も必要になると思います。

(6) 社会力の低下による学習意欲の低下

社会や他人への無関心という形での「非社会化」が進んでいますが、その一つの特徴として、若い世代のテレビやIT機器に過度に依存することによる脳機能の低下（テレビゲームに興じている学生の脳波が痲呆状態の波形と重なるという報告もある）が、自分を取り巻く自然環境や社会環境への興味関心を著しく減退させることになるという

見方があります。そして、そのことが学習意欲を低下させ、学力の低下のみならず、何かを成し遂げようとする意欲、それに思考力も、想像力も、創造力も低下させることになる、そこでまた煩わしい対人関係を避けてIT機器に向かうという悪循環に陥るのです。これについては後の『親と子の社会力』の紹介の部分で補足します。

4 学習意欲を喚起するために

子どもたちの学習意欲低下の原因には大小さまざまな要素があり、歴史や社会を背景として複雑に絡み合っています。その対策などを含めて流れをたどってきましたが、学校現場ではこれらの知識面の理解を基礎として、毎日の授業実践において、子どもたちの意欲回復を図って一歩ずつ前進していくことが大事になると思います。その取り組みの参考としていただくように2冊の本を紹介したいと思います。

- (1) 『教えることの復権』大村はま／苅谷剛彦・夏子（ちくま新書）

大村はま先生についてはご承知の方も多いと思いますが、東京で中学校の国語教師として50年以上にわたり指導されてきた方で、特に終戦直後の焼け野原の中の学校で教材も何もないときの手作りの資料による授業は国語科では伝説的なものになっています。

標記の本は当時の教え子である苅谷夏子さんが大村先生との対話の中で授業を回想して紹介し、夏子さんの夫君である苅谷剛彦さんも加わって大村先生の授業を高く評価しているものです。

その基本的な姿勢は、子どもが学ぶ上での教師の役割、特に「教えるということ」を改めて見直していこうというものです。単純な教え込みや詰め込みではない、子どもの学習をしっかりと指導するという意味での教師の教える力、それを持った例としてあげられている大村先生の実践がすばらしいものです。授業の徹底した準備を含めた「教える」ことへの覚悟が伝わってきますし、授業を受けた生徒側からも書かれているので立体的

「新しい学校づくり」をめざして ————— ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～

に授業の姿が浮かんできます。

すべてを挙げられませんが、たとえば生徒の話し合いの時間について、授業の準備として「脚本みたいに書いてみることも多かった」との述懐に、「(以前に聞いて)話し合いの予測なんて可能なのかなあ、と思ったんです。そうしたら先生は、もちろん無駄を承知でやっているのよって、平気な顔をしておっしゃって、それには驚かされました…。」と苅谷夏子さんが述べる部分にもその覚悟がうかがえます。

生徒一人一人を知るという意味では、「たとえば、自由題の作文を書かせるといったときにそこにいる全部の子どものために、それぞれ、これをやったらどうかという腹案を持ってない教師がいたとしたら、怠慢だと思いますよ。」と述べていますが、これとて単に思い付きの題を人数分そろえることではなく、大村先生の頭の中では、常に「その一人一人の生徒に育てたい力」→「その力の基本になるところの頭のはたらき」→「そのような頭のはたらきをさせる仕事」と冷静かつ計画的に考え抜かれている上で言われているものなのです。

苅谷剛彦さんが書いているように、「誰もが大村先生のような教師になれるわけではない」のですが、子どもたちの学習意欲回復のために、国語科を離れた広い立場からも、大村はま先生の存在を改めて見直す必要があると思います。

(2) 『親と子の社会力』 門脇厚司 (朝日選書)

教員が直接授業に関わる部分だけでなく、大きな社会の枠組みの中で子どもたちのおかれている状況について理解を深めることは、子どもの学習意欲の問題のために欠かせないことです。標記の本は、先に3の(6)で紹介したように、「社会力」の低下が学習意欲の低下につながる、と警告しています。「社会性」でなく「社会力」という言葉は著者の造語で、「人と人がつながり社会をつくり、それを運営していく意欲や能力であり、よりよい社会につくり変えていこうとする志向や構え

であり、それを可能にする構想力や実現能力」のことです。

その社会力の衰弱のためいわば社会が崩壊しつつあるのに、社会の構成員が社会への無関心を募らせ、社会の運営に積極的に関わろうとする意欲をなくしています。若者の意識が、かつての「頑張れば何とかなる」から、「頑張っても仕方がない」、さらに今や「頑張る気もしない」と、無気力な状態に陥っている訳です。その根本原因は、他人に対する関心と愛着と信頼感の喪失にあるという分析は鋭く、子どもたちを含む家族の機能の変質の指摘(「ホテル家族化」等)は的確です。これらの状況に対して筆者の考える対策は、「私も社会の一員である」という自覚を培うことであり、地域を「新しい親密圏」にすることです。特に学校教育では「生きる力」をつけるための「総合的な学習の時間」を充実させることを重視しており、授業の周囲の部分の理解が結局授業創造につながることにあります。

以上の2冊の本の一部だけしか紹介できませんでしたが、学校現場で子どもたち全員が生き生きと授業に臨むようになるため、少しでも役立つことを期待いたします。

5 おわりに

社会全体の高度な情報化の中で、「学校知」と呼ばれる部分の比重が小さくなると言われている状況下、学校教育が地域や保護者の方々に信頼され、その期待に応えていくのにまず必要なことは、やはり「授業の充実」と「授業の改善」による「学習意欲の高まり」と「学力向上」の進展です。県教育センターにおいても、各種の調査研究を進め、そのデータを基に教員のニーズに即応した研修講座が行われるように努力しております。県内のすべての子どもたちの学習意欲が高まり、学力向上が一層進められるよう共に頑張っていきたいものです。

教育調査チーム

継続調査と緊急を要する調査の実施 2004ふくしまの教育の現状を分析

昨年度は「ふくしまの学習意識」についての調査と「学校評議員設置に関する調査」を行いました。調査結果は教育センターwebに掲載しています。調査に関する問い合わせから、各学校や各種機関において様々に活用されている様子が見えてきます。

本年度も現状分析が基礎データとして役立つことを目指し、次の調査を実施します。

1 「教育課程（届）調査」

「学校の自主性・自律性の現状と課題を把握し、工夫された事例を紹介する。また、カリキュラムセンターを展望し、県内全公立小・中学校、県立高等学校の教育課程をいつでも手に取れる環境づくりに努める」ことを目的に教育課程（届）の内容を調査する。

(1) 調査内容

- ・教育目標、教育課程編成の方針等
- ・年間授業時数、日課表・時間割、単位時間、年間行事予定の工夫
- ・各教科・科目の年間指導計画の工夫
- ・総合的な学習の時間等の全体計画、年間指導計画の工夫

(2) 調査対象

- ・公立小・中学校、県立高等学校教育課程

(3) 調査日程

- ・調査、分析、まとめ…平成16年7月～11月
- ・公表…平成16年12月

2 「ふくしまの学習意識」に関する調査(第2年次)

「本県における児童生徒の生活状況及び学習に

関する意識について経年で現状調査を行うことによって、本県の課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料とする」ことを目的に2年次目の調査をする。

(1) 調査内容

- ・生活状況～生活時間帯、基本的な生活習慣、余暇利用、家族との関わり
- ・学習に対する意識～教科学習、学習時間、家庭学習の現状、自己向上の願い、コンピュータの利用、将来の目標
- ・保護者の子ども観～生活時間帯、余暇利用、子どもへの関わり、家庭学習の様子、希望する進路、子どもの学習への期待
- ・保護者の教育行政に対する要望～学習環境、人間性・社会性の育成、学校・家庭・地域との連携、教育行政等に要望すること

(2) 調査対象…抽出校

- ・小学校第3・第6学年児童・保護者2,472名
- ・中学校第2学年生徒・保護者1,236名
- ・県立高等学校第2学年生徒・保護者1,200名

(3) 調査日程

- ・調査、分析、まとめ…平成16年7月～17年1月
- ・公表…平成17年2月

企画・研究グループ

TEL 024-553-3141 (内線14)

e-mail : takizawa.reiko@yg34.fks.ed.jp

学校経営・運営に資する外部評価等の 在り方に関する実証的研究

『学校評価の試案』は教育センターWebに掲載されています。順次各校の取り組みを紹介していきます。

I 研究計画

1 テーマを設定した背景とテーマの意義

平成15年度学校評価研究チームは、平成14年・平成15年の2年間にわたる研究の成果を、『学校評価の試案－計画・実践・評価・改善の営みの確立を目指して－』として公にした。『試案』では、評価に関して、教職員の自己評価を基本としつつ、児童生徒・保護者・地域住民・学校評議員等による評価を取り入れ、より客観性を持たせる方向性を打ち出した。

平成16年度、本県では、県立高等学校を対象に「学校評価モデル事業」が行われ、事業の重

要な柱の1つが「学校評議員及び外部専門家による外部評価」である。

一方、中央教育審議会答申（平成16年3月）は「地域が参画する新しいタイプの学校（地域運営学校）」及び「（構造改革特区における特例としてではあるが）公立学校（幼稚園・高等学校）の管理運営の委託等」を提言し、改正地方教育行政法も成立したが、答申では、これらの学校の公共性や公平性・公正性、さらには継続性を担保するために、学校自身による自己評価に加え、教育委員会による不断の点検・評価、指導等が必要であるとし、「（第三者）評価の仕組みの構築に向けて研究開発等を進める必要がある」と述べている。

このような状況を踏まえると、学校経営・運営に関わる自己評価・保護者等への情報提供の在り方に関する研究を深めつつ、学校の主体的な教育活動を支援・促進する外部評価の在るべき姿を実証的に研究することは、本県においても緊急かつ重要な課題であると言える。

当研究チームは、「学校評価モデル事業」に参加して、モデル校における学校評価から浮かび上がる問題点を整理し、学校評価の在り方について引き続き実証的に研究を進めると共に、独立行政法人化された大学の外部評価、イギリス、ニュージーランド等の外部評価、さらには行政評価の手法を参考として研究しつつ、福島県として現実的かつ実効性のある外部評価の在り方を提案したい。



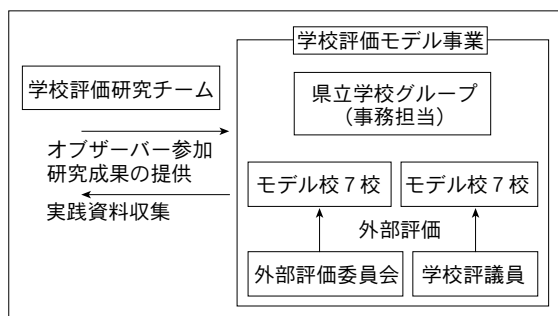
2 研究の概要

(1) 調査研究

- ・学校、企業、行政における内部評価、外部評価に関する文献調査
- ・先進地域・教委・機関等の視察等による資料収集と調査

(2) 外部評価システムの構築及び学校評価に関する情報提供

- ・「学校評価モデル事業」実施領域（県立学校グループ）、モデル校、学校評議員、外部評価委員会等との連携を通して、モデル事業及びモデル校の実践に関わる中で調査・研究を行う。



- ・学校評価研究チーム独自の、モデル校及び外部評価委員等に対するアンケート、インタビュー等による実証的資料の収集及び研究を行う。
 - ・県内各学校の学校評価実践に関する資料を収集し、分析に当たると共に、情報の提供に努める。
- ### (3) 提言資料の作成
- ・県、各市町村教育委員会が学校評議員及び第三者による外部評価システムを構築する際に参考となる資料の作成・提言を行う。
 - ・『学校評価の手引き(県立学校版)』または『県内各学校が参考となる学校評価実践資料集』等の発行・Web化を行う。(平成15年度『学校評価の試案』の改訂)

II 研究経過(モデル事業関係を中心に)

1 モデル事業概要

学校評価モデル事業は県立学校グループが主管する事業で、モデル校は以下の14校である。

◎外部評価モデル校

福島高校、白河旭高校、岩瀬農業高校、喜多方工業高校、平商業高校、双葉翔陽高校、富岡養護高校

◎学校評議員モデル校

福島明成高校、須賀川高校、葵高校、いわき海星高校、好間高校、小高工業高校、聾学校
各校の実践のうち、①学校経営計画（『学校経営・運営ビジョン』）に示された重点事項に関する取組、②自己評価計画・実践（学校評価関係校内組織の活動状況を含む）の2点について多面的な評価を行い、評価結果を各校にフィードバックし、各校の個性化や質的充実に向けた主体的な教育活動を支援・促進するために外部評価を行い、平成16年度より全県立高校で実施される外部評価の在り方を検討する。

2 モデル事業経過

5月10日 学校評価モデル事業合同会議

外部評価委員、モデル校教頭、学校評議員
(学校評議員モデル校7校から各1名)

5月10日 第1回外部評価委員会

5月27日～学校訪問開始

※外部評価者の訪問は年2回、学校評議員会は年3回行われる。チームはオブザーバーで参加し、資料の収集に当たっている。

【学校評価研究チームより】

チームは、吉田豊彦(高校)、鈴木久米男(中学)、吉永雅也(高校)の3名で研究を進めています。ご質問等はチームまでお願い致します。

企画・研究グループ 学校評価研究チーム
TEL 024-553-3141 (内線15)
e-mail: yoshida.toyohiko@vc85.fks.ed.jp

1 はじめに

昨年度、カリキュラム研究チームでは、「学びの原動力」と「問題解決能力」、「教科学力」の関係について、調査分析・研究を行った結果、これらの3つの力は相互に関連し合い、相乗効果を持って機能していることが分かった。

また、知識の構造化や、知識の関連づけなどの学習方略や主体的に学習するための学習計画力など、「学びの原動力」に位置づけた「自ら学ぶ力」の教科学力に及ぼす影響が大きいことも分かった。

そこで、今年度は、昨年度の研究成果を踏まえ、子どもたちに「学習者としての自立」を促し「自ら学ぶ力（自学自習力）」の育成を一層進めるための手だてについて研究を行う。

2 研究の概要

学習者として自立した子どもを育てる具体的手だてとして有効であると考え、「学びの意義、学ぶ目的、学習内容、学習方法、到達目標、評価方法、発展・補充学習等を内容とする『子どもの学びを支援する^(注)シラバス』」の研究と開発を行うとともに、シラバスを通しての授業改善や子どもの「確かな学力」の向上、学校の活性化に資する学校支援を行う。

(注) 教えるべき目標、内容、学習方法、指導計画、評価等の概要を示したもの。syllabus。
学習者が自立するための視点として、次に示

す内容が重要であると考え。

- 学習することの意義、目的、楽しさを知っていること。
- 自分の能力の向上、現在の理解状態をモニターできること。
- 自分に適した学習方略（方法）を知っている。または、学習方法を探索、検討できること。
- 知識の構造化や関連づけができること。
- 分からない時にはどうすればよいかを知っていること。

3 研究の内容

(1) シラバスの研究と開発

学校が、子どもや保護者等に積極的に情報を提供し、説明責任を果たしていくための手段として有効なシラバスを研究する。

また、教育現場のニーズに応えるため、研究協力員として依頼した所外の研究直接参加者や間接参加者の協力を得て、シラバスの役割、効果、活用方法、シラバスの実践事例等を内容とする「子どもの学びを支援するシラバスの手引書」を編集・作成し、県内の小中高等学校に配付する。

なお、「子どもの学びを支援するシラバスの手引書」は、年度末に県教育センターwebページの研究報告書において掲載する予定である。

シラバス作成のための視点として、次の(1)~(3)に示した内容を重視する。

- (1) 学校教育目標を実現するためのシラバスを目指す。
- (2) 子どもにとってわかりやすく、チャレンジ意欲をかき立てるような、教師のメッセージが伝わるシラバスを目指す。
- (3) 子どもの主体的・計画的な学習を支援するとともに、教育内容に関する情報を保護者や地域に対して提供するのにふさわしいシラバスを目指す。

(2) 研究協力校への学校支援

シラバスを通しての実践研究を行うために、研究協力校（中学校・高等学校各1校）において、シラバス作成のための支援を行うとともに、シラバス作りを通じた授業改善や子どもの「確かな学力」の向上、学校の活性化に資するための学校支援を行う。

また、シラバスの効果についての調査・分析も行う。

具体的な内容は、次の通りである。

- シラバスの作成や効果的活用のための説明、アドバイス
- 先進校の実践事例の紹介
- 授業実践参観を通しての授業改善や、指導技術の援助
- 教材開発の視点・方法の支援
- 生徒の実態把握・現状分析、アンケート、課題の洗い出しのための支援

4 研究の方法と組織

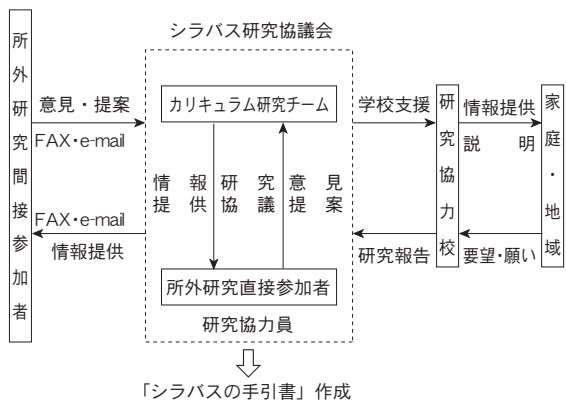
研究は、県教育センターカリキュラム研究チーム4名と、直接研究参加者18名、間接研究参加者5名からなる所外研究協力者と中高等学校1校ずつの研究協力校と連携し、進めていく。

(下図参照)

また、理論研究だけではなく、「研究から実践」と「実践から研究」という2つの方向で行っていく。基礎研究で得られた成果を実践の場で試行し、また、実践の場で試したことや見出した現象を研究する。

なお、直接研究参加者とともに組織する「シラバス研究協議会」を開催し、シラバスの在り方について意見交換、研究協議を重ね、「シラバスの手引書」として提言する。

図 所外研究参加者及び研究協力校との関わり



※ 研究に関するご意見、ご質問をいつでもお受けいたします。

企画・研究グループ

カリキュラム研究チーム 遠藤雄二郎
 e-mail endo.yujiro@vr92.fks.ed.jp
 TEL 024-553-3141 (内線16)
 FAX 024-554-1588

授業で IT を生かすために ～情報化推進研究チームの取り組み～

現在、福島県内のほとんどの学校でインターネットが利用できる環境が整備され、600校以上の学校がふくしま教育総合ネットワーク(FKS)に接続されて安全で安定した高速なインターネット利用ができる環境にあります。一方、文部科学省の「情報教育の実態等に関する調査」によれば、福島県のコンピュータを利用できる教員の割合は約9割であるのに対し、実際に授業で活用している教師は約6割という状況です。

このような現状を踏まえ、情報化推進研究チームでは「学習におけるIT活用とその支援のあり方」というテーマで、学校や専門家などと連携をはかりながら研究等に取り組んでいます。その取り組みの一端をご紹介します。

1. 先進的な学習形態の研究

福島県内には小規模校が多く存在し、教員配置などの関係から、教員が複数の教科を(免外)指導する 경우가少なくありません。このような学校を支援するために、情報化推進研究チームでは、授業をサポートする指導教材をネットワークを介して提供する実践研究に取り組んでいます。



提供する教材は、教科の指導内容や補助的な指導資料をビデオ撮影してFKSのサーバに蓄積

し、研究実践校がアクセスすれば、授業で活用・演習することが可能で、新たな授業形態を構築するものです。

本年度は学年あたり1クラスの小学校を対象に下記の計画で研究に取り組んでいます。

Ⅰ期	箏による創作(6学年3校)
Ⅱ期	民俗芸能(5、6学年5校程度)
Ⅲ期	Ⅰ期・Ⅱ期の改善(5、6学年5校程度)

(特)期は和楽器「箏(こと)」による創作を題材に取り上げ、小坂小学校(国見町)、沢石小学校(三春町)、湯本小学校(天栄村)と教育センターの間で実践研究に取り組みました。



箏(こと)の練習の様子

教育イントラネット上の掲示板に授業の感想や箏(こと)の講師に質問してみたいことなどを寄せてもらい、講師からのアドバイスを各学校の児童が共有すること、ビデオ会議を通じて相互に発表の場を持つことなどを通じて、学習の深まりと、限られた小規模な学級集団の中だけでは得られない成就感を得させることを目的にしています。このような新しい学習形態を取り入れることで教育の新たな可能性が広がることが期待されます。

2. ふくしまの教育情報の提供

国レベルでの教育用コンテンツの開発が進められる一方、地域の特徴ある情報をデジタル教材化した地域コンテンツの整備が期待されています。情報化推進研究チームでは、授業で利用できる地域コンテンツ、リンク集の整備とそれらを活用した授業実践モデルに関する研究に取り組んでいます。

(1) ふくしま教育情報データベース



県や各市町村の行政・教育機関、教育関係者などが保有する写真、ビデオや記録資料、教育関係機関が発行する教育資料等を対象に収集し、デジタルデータに加工しました。現在、テキスト58,000頁、画像45,000枚、動画5,892クリップ、計約10万件のデータベースとして完成し、インターネットに公開しています。

(例)

- ・各市町村の小学校社会科副読本（テキスト）
- ・県教育委員会、教育センターの機関誌（テキスト）
- ・野口英世の生涯を記録した歴史的な写真
- ・90市町村の産業、名所旧跡、災害等の写真
- ・県内の昭和を記録した民友ニュース（動画）

ふくしま教育情報データベースに掲載されたデータは、学校での教育活動で自由に利用できるよう著作権者の許諾を得ており、各画像には「ED1」「ED2」ロゴマークを付加して利用方法

タイプ	ED1	ED2
利用方法	素材は利用できるが、再編集できない	素材は利用でき、再編集できる
ロゴ		

を明示しています。また、電子黒板などで拡大表示できる高精細・高品質であることも特徴の一つです。映像は、場面ごとにクリップビデオとして編集、画面サイズと記録方式の異なる3種類の動画形式（RealMovie、MPEG-1、MPEG-2）で記録し、次世代の利用にも配慮しています。



(2) 推奨 Web

授業などで活用している優良な Web サイトに関する情報を県内の先生方から収集し、調べ学習型、シミュレーション型など、授業で利用しやすいように分類・公開しています。

(3) 授業実践モデル

コンテンツを授業で利用するために、学習指導案、ワークシート、活用するコンテンツの情報など、教師が授業を行う際に必要な情報を教材としてパッケージ化し、検証授業を実施した上で授業実践モデルとして公開しています。

(4) モニタリング

今年度は、学校や先生方の意見や実践情報などを広く取り入れるためのモニタリングを実施し、福島教育情報のポータルサイト(玄関)を目指します。

企画・研究グループ情報化推進研究チーム
 e-mail jyugyouni it@ml.fks.ed.jp
 TEL : 024-553-3141 (内線17)

言いたいけど、言えない？

～望ましいコミュニケーション能力の育成に関する指導援助～

誰でも自分の言いたいことをうまく伝えられなかった経験があるのではないのでしょうか。現に学校生活や家庭生活の中で、自分のことをうまく相手に分かってもらえず、辛い思いをしている児童・生徒を見かけます。今回は、望ましいコミュニケーション能力を育成するための、相互尊重の精神に基づいた〈自己表現法〉について考えてみます。

〈事例〉二人のミホさん

佐藤先生(20代後半女性、高校1年生担任)は、7月の三者面談を終え、生徒の面談時の様子に何か違和感をもちました。

それは、5月の二者面談での本人の進路希望と、今回の三者面談での保護者の進路希望とが全く違っているケースが予想外に多かったからです。

中でも、一番印象に残ったのはミホさんの様子でした。二者面談では「将来はアニメの声優になりたいです。そのため東京の専門学校へ進学したいです。」と目を輝かせて担任に語ったのですが、三者面談では父親の言葉にただ黙ってうつむいたままだったのです。



佐藤先生は、ミホさんをはじめ、何人か似

たような様子の生徒がいたことが気がかりでした。いずれの生徒も保護者の言う希望に対して何を言うわけでもなく、ただ黙ってその話題が過ぎ去るのを待っているかのようでした。佐藤先生は、これらの生徒が進路に対する自分の夢や希望を親にきちんと話せないでいることが、心配になりました。

次の日の放課後、佐藤先生は廊下でミホさんのことを呼び止め、聞きました。

「アニメの声優になりたいということは、お父さん知っているの？」

すると、ミホさんは急に表情が暗くなり「いいえ、言っても無駄なんです。」

とだけ言って走り去りました。

その数日後、生徒会主催の球技大会が行われました。佐藤先生はクラスの生徒達を応援しようと体育館に入ったところ、意外な光景を目にしました。あのミホさんが、バレーボール種目の選手として相手チームの反則に対して激しい口調で審判に抗議をしていました。そこには、父親の前で黙ってうつむくだけの気の弱いミホさんではなく、攻撃的なミホさんがいました。

1 佐藤先生の試み

佐藤先生はミホさんの姿に自分の目を疑いました。と同時に、生徒のことを何も知らなかった自分自身を腹立たしく、また情けなく思いました。ミホさんは決して気の弱いだけの生徒ではなく、「言いたいけど、言えない」思いを内に秘め、悶々としている生徒なのだ気付きました。

「ミホさんのように自己表現がうまくできないでいる生徒の力になってあげたい。何かいい方法はないものか……」数日間、佐藤先生はいろいろと方法を考えましたが、なかなか良いアイデアが浮かんでできません。

そんなある日の放課後、教育相談係の鈴木先生が近づいてきて佐藤先生に言いました。

「どうしたんですか？ 顔色悪いですよ。心配事があるのなら、相談に乗りますよ。」

「実は、クラスの生徒のことなんですが…生徒達ももっと自分の思っていることを話すことができるようになって欲しいんです。だけど、どうしていいかわからなくて…」

「うーん。実は先週の研修会でアサーショントレーニングについて勉強して来たので、学期末の伝達講習会で紹介しようと思っていたところです。でも、早い方が良さそうですね。佐藤先生、今、都合はいいですか。」

佐藤先生は、鈴木先生から説明を聞き、早速、次週のホームルームでアサーショントレーニングを実施することにしました。

【佐藤先生のホームルーム】

(1) アサーショントレーニングの説明

3パターンの表現方法を説明しました。

(2) 三人組によるロールプレイング

★非主張的な表現

A男：「えんぴつ貸してよ。」

B子：「あの……」

★攻撃的な表現

A男：「えんぴつ貸してよ。」

B子：「なんで貸さなきゃならないの。」

★アサーティブな表現

A男：「えんぴつ貸してよ。」

B子：「貸してあげたいけど、わたしもこれしかないから貸せないわ。」

ロールプレイングが始まって間もなく、ある生徒が相手の攻撃的な表現の後に不機嫌になり、続けるのが嫌だと言い出しました。またある生徒は、アサーティブな表現に恥ずかしさを感じて何も話してくれませんでした。

佐藤先生は、生徒の授業後の感想を読み、授業の準備が不十分であったことや、生徒たちの実態をふまえず、実施することばかりに気をとられていたことに気付きました。

1 回目授業の生徒の感想

田村君：こんなこと、やっても意味ないと思う。

林さん：なんか、相手の言い方がムカつく。

森本君：ロールプレイングは恥ずかしいので好きではない。

2 アサーショントレーニングとは

どの児童・生徒も、学校、家庭、地域・社会で他者と気持ちよくコミュニケーションを交わし、分かり合い、尊重し合って生活したいと望んでいます。そのための社会的技能を身につけるトレーニングとしてアサーショントレーニングがあります。

アサーショントレーニングの位置づけ

より良いコミュニケーション

うまく聴く

積極的傾聴

うまく話す

アサーション
トレーニング

アサーショントレーニングは、お互いを大切にしながら、それでも率直に、素直にコミュニケーションする相互尊重の精神に裏付けられた自己表現のトレーニングです。必要なときにはっきりと意見を言い、感情的にならずに話し合うことにより、相手も自分も大切に自己表現のトレーニングです。

表現方法の3つのパターン

- ★非主張的な表現
(相手を優先し自分を大切にしない表現)
- ★攻撃的な表現
(自分を優先し相手を軽視、無視する表現)
- ★アサーティブな表現
(自分も相手も大切に表現)

3 佐藤先生の再挑戦

佐藤先生は、何とかして生徒達に自分の思いを話せるように、また相手の思いを受け止められるようになって欲しいと思いました。そこで、前回のホームルームの反省点を生かし、アサーショントレーニングに関わる資料をもとに、ロールプレイングの注意点を頭に置き、再挑戦することにしました。

注意点

- ・教師がまず、モデリングして見本を示す。
- ・生徒の心的なショック防止のため演技だと言う認識を持たせ終了後は役を断ち切る。 など

(1) 教師によるモデリング (今回は鈴木先生にも協力してもらいました。)

★非主張的な表現

佐藤先生：「ジュース買ってきて。」

鈴木先生：「あの……」

★攻撃的な表現

佐藤先生：「ジュース買ってきて。」

鈴木先生：「なんでっ、絶対やだ。」

★アサーティブな表現

佐藤先生：「ジュース買ってきて。」

鈴木先生：「私は今とても忙しいので、あなたのジュースを買いに行くことができません。」

(2) 3人組によるロールプレイング

① レストランでステーキを注文したが、店員が運んできたのはハンバーグという場面設定。

(客役、店員役、観察者)

★非主張的な表現

店員：「お待ちせしました。ハンバーグをお持ちしました。」

客：「あの……」

客役の生徒は、すごくもどかしい様子。

佐藤先生のコメント

「言いたいことが伝わりませんね。」

★攻撃的な表現

店員：「お待ちせしました。ハンバーグをお持ちしました。」

客：「ハンバーグじゃなくてステーキなんだよ。」

店員役はとても驚き、不愉快な様子。

佐藤先生のコメント

「店員役は、ショックですよ。」

★アサーティブな表現

店員：「お待ちせしました。ハンバーグをお持ちしました。」

客：「注文したのはステーキで、ハンバーグではないので、取りかえてもらえませんか。」

店員：「これは失礼しました。」

客役も、店員役も納得している様子。

佐藤先生のコメント

「これだと、お互いに悪い気はしませんね。」

② 家庭で、父親に大学進学をすすめられたが本当は美容の専門学校に行きたいという場面設

定。(娘役、父親役、観察者役)

★非主張的な表現

父：「高校卒業後は大学に行くように。」

娘：「うん……」

娘役は悲しそうな様子。

観察者の感想

「大学進学が、いやそうに見えました。」

★攻撃的な表現

父：「高校卒業後は大学に行くように。」

娘：「大学なんて行きたくない！美容の専門学校に行くんだ！」

父親役はびっくりした様子。

観察者の感想

「喧嘩しているみたいでした。」

★アサーティブな表現

父：「高校卒業後は大学に行くように。」

娘：「お父さんの大学へ行って欲しいという気持ちはわかったわ。でも今、私は美容の専門学校へ行きたいと思ってるの。これからじっくり考えてみるわ。」

お互いが言いたいことを言えている様子。

観察者の感想

「大人っぽく見えた。お互いの言いたいことが言えているように思えた。」

2 回目授業の生徒の感想

土屋君：言いたいことを言えるのはいい。けど、強く言われたときは嫌だった。
島さん：どうすれば人間関係がうまくいくか、少しわかった様な気がします。
星さん：とても不思議な感じがした。普段何気ないことでここまで詳しく説明されたのは初めてだった。今度からはアサーションを心がけたいです。

佐藤先生は、この授業を通して「生徒たちはやはり、自分の思いを伝えたいと思っているんだ。」と確認することができました。また、アサーションは単なる自分の思いを上手に伝えるた

めの技術にとどまることなく、相手を大切にしたいものの見方、考えを含む、広い意味での〈自己表現〉であることにも気づきました。そして、教師である自分自身がアサーションを心がけ、生きたモデルになりたいと思いました。

この授業を実施した放課後、ミホさんがにこにこしながら佐藤先生の所にやってきて、

「私、父にアニメの声優を目指して専門学校に行きたいことを話してみようと思うんです。」と言いました。

佐藤先生は

「ミホさんの気持ちが伝わるといいね。」と笑顔で答えました。

4 おわりに

今回は、父親に対して進路希望を言いたいけど言えないという事例から、望ましいコミュニケーション能力の育成に関する指導援助を取り上げました。

その一例として、アサーショントレーニングを紹介しました。

当教育センター教育相談チームではこれまで、教育相談の理論、手法を生かし、「人間関係をつくる力」を育てる指導援助プログラムを開発してきました。今回の事例のようにホームルーム等の授業で活用していただければ幸いです。(上記プログラム集を入手ご希望の方は当チームまでお問い合わせ下さい。024-553-3141 [内線26番])

◇引用・参考文献

「人間関係をつくる力」を育てる指導援助プログラム
福島県教育センター教育相談チーム
アサーショントレーニング 平木典子 日本精神技術研究所
高等学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省
児童心理 コミュニケーションを育てる 金子書房

スキルアップのために 講座テキストの活用を!! 新講座「よりよく伝えるマルチメディア」で プレゼンテーション力を高めましょう!

I 講座テキストのダウンロードサービス

情報教育チームでは、前年度専門研修で使用したテキストのいくつかを教育センターのWebページで公開しています。

現在、次の13講座（テキスト数18、演習用ファイル9）のデータが掲載されています。

小中	初心者のためのExcel・PowerPoint入門講座
高校	初心者のためのアプリケーション入門講座
小中	校務で活用するExcel実践講座（Excel中級）
高校	校務で活用するExcel応用とAccess基礎講座
小中	Excel応用・Access入門のコース別講座
小中	授業で活用するマルチメディア講座
高校	画像・映像処理の基礎を学ぶマルチメディア活用講座
小中	初心者のための学校Web作成講座
高校	初心者のためのWeb作成講座
小中	インターネット技術講座
高校	インターネット技術講座
小中	校内LAN構築講座
小中	Visual Basicで教材を作成するプログラミング講座

テキストはすべてPDFファイルで提供していますので、Adobe Reader等のPDFファイルを開くことができるソフトウェアがインストールされていれば、閲覧や印刷などができるようになります。各学校で実施している校内研修や地域の合同研修、先生方の自主研修等に是非お役立て下さい。

ダウンロードの手順

下記のURLを入力し、福島県教育センターのTOPページを表示します。

<http://www.center.fks.ed.jp/>

サイドメニューの「チーム紹介」をクリックし、さらに「情報教育チーム」を選択して、CONTENTSの中から『講座テキスト閲覧サービス』をクリックすると、ダウンロード可能なテキストの一覧が表示されます。

小中	Visual Basicで教材を作成するプログラミング講座	（研修者の声）
Visual Basic入門	（121MB）	（演習用ファイル：7.57MB）

ダウンロードするテキスト名の上で、右クリックし『対象をファイルに保存』を選択し、保存先や保存名を確認し、「保存」をクリックします。テキスト以外の資料等は、LZH形式で圧縮されているので、各種フリーソフト等を使用して解凍して下さい。

なお、Adobe Readerや解凍用の各種フリーソフトのダウンロードについては、講座テキスト閲覧サービスのページを参考にして下さい。

II 新講座「よりよく伝えるマルチメディア」

今年度新設された、小・中・高等学校「よりよく伝えるマルチメディア」講座の紹介をします。この講座の詳しい講座名は、「デジタル素材を利用した効果的なプレゼンテーション(表現・技法)講座」です。

この講座では、CM等の制作を行っている講師から、より効果的な表現を意識したデジタル素材作成の基本について指導を受けます。また効果的なプレゼンテーションが行えるよう、専門の先生の講義と具体的なテーマに基づく班別演習を行います。このように、単なるプレゼンテーション作成ではなく、一歩進んだプレゼンテーションの知識と技能を身につけることができる講座です。

この講座で身につけた技能は、先生方はもちろん学校内で児童生徒が行うプレゼンテーションに対する指導にも大いに役立てられるものと期待しています。

講師
「デジタル素材作成の基本」 デジタルメディアプロデューサー
ディレクター 澤田 正人 氏
「効果的なプレゼンテーションのための基礎」 日本福祉大学 教授 影戸 誠 氏

貴い「瞬間」を振り返って

東白川郡棚倉町立棚倉小学校 教諭
(平成15年度長期研究員)

薄葉征子

はじめに

不安な気持ちで、教育センターに足を踏み入れた今年の4月1日。しかし、教育センターでの研究が進むにつれ、「こんなことがしたい」「あんなこともしたい」という、気持ちがどんどんふくらんでいきました。

広い視野で

これまでの生活では、日々の授業や子どもとのことに追われ、教育界の動向など考えずに、目先のことにとらわれ過ぎていたように思います。教育に関する国際機関や文部科学省、教育政策研究所などの調査・文献、現在の教育に対する専門家の様々な見解を読むことで、現在の教育の動向について目を向けることができました。

算数科を中心に

研究單元ばかりでなく、様々な算数科に関する文献から、教材の本質や系統性についての理解を深めることができましたように思います。また、授業でやってきたことは、こういうことだったのかと、確かめることもできました。さらに、自分の研究内容（「構成的アプローチによる算数の学習」）が認知心理学と深く関わっていることがわかり、教科指導と認知心理学との関連についてもっと調べなければならぬと思いました。

読書すること

教育書はもとより、様々なジャンルの本に触

れることができました。本の中に、自分の心の中にある何かとぴたり合う言葉を見つけたときのうれしさ、自分のこれまでの考え方を覆すような本に出会えたときの新鮮さ……。忘れられない本の数々に出会うことができました。その中の一冊が、V・E・フランクルの『それでも人生にイエスと言う』というタイトルの本で、ものごとの見方・考え方や生きることの意味について深く考えさせられた一冊でした。

たくさんの人とのつながりの中で

同じ長期研究員のメンバーはもちろんのこと、センターの先生方や講座の研修生とのたくさんの出会いがありました。校種を超えて教育の話題を聞いたり、自分の疑問や思っていることを話したりして、これまでの自分の考えを広げていただくことができましたように思います。

おわりに

この4月、再び子どもたちのいる学校に戻りました。教育センターで研修を受ける前と後では、どこがどうちがうのか、自分にはよく分かりません。きっと、それは、自分で気づくものではないのかもしれませんが、でも、はっきり分かっていることは、まだまだ足りていない自分がいるということです。そして、教育センターで学んだことと今の仕事とを関連付けていかなければならないということです。

最後に、このような貴重な時間を過ごさせていただいたことに心から感謝いたします。

基本研修から

平成16年度初任者研修 宿泊研修

初任者研修は、180時間以上の校内における研修と、25日の校外における研修が行われます。校外における研修25日の中では、教育センターの計画により宿泊研修が実施されています。「教職員の服務と勤務」等の基礎的素養を始め、学習指導、生徒指導、情報教育等について学びます。

■県立高等学校初任者研修

16年度教育センターの研修の先頭を切って、4月に、2回の宿泊研修が行われました。4月26日～28日の一次研修では、教科の研修を中心に、健康教育、学校評価についての講義等が行われました。また、演習を通して「生徒理解と対応」について学びました。



人さし指で輪を下ろす課題に挑戦

2月の宿泊研修、9月に行われる教科別研修を通して、特に教科の指導力の向上を目指します。

■公立小・中学校初任者研修

1回目の宿泊研修は、6月1日～3日、磐梯青年の家で実施されました。小学校103名、中学校81名の初任者の先生が参加しました。

協議「二ヶ月の教職経験を振り返って」では、活発に意見が交わされました。また、演習「自然体験活動」では野外炊飯を実施し、25班に分かれて、カレーライスと豚汁を作りました。初任の先生方の見事な実行力と協力体制が発揮されました。



おいしくできました。

2回目の宿泊研修は、8月、教育センターで、小学校、中学校に分かれて実施します。

■教育長の講話から

小・中、高校ともに、初任者に対する期待を込めて、富田孝志教育長の講話がありました。その中で、教育長の立場から「学校への信頼回復のために、課題の多いところを明らかにして、改善していく努力をしなければならない。」と述べるとともに、教員としての立場から「初心を忘れないで欲しい。安易なことに慣れないで欲しい。社会の変化を感じ取って欲しい。」ということ、ご自身の経験を踏まえて分かりやすく話されました。そして、最後に、「のどかな秋の日に、手をつないで散歩している親子を見かけた。ところが、その母親は、ヘッドフォンで音

楽を聴いている。暖かな太陽や金木犀について話していれば、それは子どもにとって母親と過ごしたい時間の原風景になったかもしれない。短い時間をどのように活用するかは、その母親の考えで変わってくる。学校にも同じことが言える。一緒に過ごした時間の長さではなくて、教える側の人間としての広がりや力量が問われてくるのではないか。」という問題提起がありました。



■講義から

今年度、新たに「健康教育」と「男女共同参画社会」についての講義が行われます。

「健康教育」では、学校の安全に万全を期す時代であることを踏まえ、施設や登下校時の安全の確保、食や感染症、薬物に対する対応、高校においては性教育の必要性等について学びました。

「男女共同参画と学校教育」では、人権やユニバーサルデザインの考えに基づき、男女の特性を理解し合いながら、男女ひとりひとりが個人として尊重される社会の必要性について学ぶこと、学校においては、生徒に、教職員に、ジェンダーバイアスがないかチェックし、改善策を講じていくことの大切さが話されました。

■講演から

「社会人とマナー」という題で、福島学院大学名誉教授菊地史子先生による講演が行われ、その中で次のようなことを話されました。



「社会人の評価は、能力・実力が50、態度・人柄が50です。この1年間で身につけてほしいポイントは、3つ。1つは、対人能力です。人の気持ちや思い、考えをマニュアル化することはできませんから、個々に対応しなければなりません。その原点は、表現力です。接客話法の原型として、『前置き用語+用件+語尾』の形を覚えてください。前置き用語として、『申し訳ありませんが』『お手数ですが』『おそれいりますが』といったクッション言葉を使います。語尾は、『お待ち頂けませんでしょうか』のように、依頼・お願いの形で結びます。ポイントの2つ目は、優先順位の判断です。判断のものさしは、重要度と緊急度の度合いです。自分で判断できないときは、必ず早めに指示を仰ぎます。3つめのポイントは、状況判断です。相手の気持ちを思い、考えを察知することができるよう、アンテナの感度をよくしておくことが大切です。」

具体的な問題演習と、菊地先生のお話しになる様子を通して、ことばの大切さ、人間関係の大切さについて学びました。

講演

平成15年度 福島県教育研究発表大会

「これからの社会、これからの教育」



養 老 孟 司

平成16年2月13日(金)、福島県教育研究発表大会が開催されました。その中で、「これからの社会、これからの教育」と題し、東京大学名誉教授・ムシテックワールド館長の養老孟司先生の講演が行われました。その講演の概要を紹介します。

これからの社会とか、これからの教育とかを考えるときに、私は、もう66になりますので、どうしても自分の過去のことを考えます。

過去のことを考えるということは未来を考えることです。戦後の大きな特徴として、家からだんだん仏壇がなくなる、つまり祖先のことを考えなくなると、当然のことですが先のことを考えなくなって、ほとんど現在に時間が縮小してまいります。それは、これまで生きてきてしみじみ思うので、特に、教育ですと、最初から乱暴なことを言うようですが、本音で言って、日本の社会というのは、子供を大事にしてこなかったという気がします。つまり、戦後の社会の変化というのは、べつに子供のことを考えて変化したわけではなくて、専ら大人の都合で変化したという、それははっきりしていると思います。子供中心に動いていない。つまり未来がない。未来のことを考えなくなったということだと思います。

それは昭和30年代に子供の遊び場がないという表現で最初はされておりました。今考えてみま

すと、なぜそうなっていったかは、非常にはっきりしているように私には思えるので、それはちょうど、都会から緑が消えていったのと同じことだと、よく申し上げる。緑がなくなることと、子供がいなくなる、少子化ですね。あるいは、子供のことを考えなくなるということは同じことである。どうして同じかと言うと、基本的に子供も緑も自然だからであります。人間が意識的に作らなかったものを自然と考えますと、子供というのはその自然の部分非常に多く持っております。自然の出来事と全く同じであります。予定したとおりには絶対にかない。そういう意味で自然ですから、都会化しますと当然、子供の地位が下がります。子供の地位がどんどん下がって、私は今、最低になっているだろうと思っています。

その結果、子供は減ってきましたから、何が起こったかと言うと、今は、異年齢集団がほとんど成立しないとされています。同年齢、せいぜい同じクラスの子供たちと遊んで、子供が団子になるということがない。異年齢集団がな

げ重要かという、私自身の体験で言いますと、4歳、6歳、8歳という子供が一緒になっていれば、6歳の子供は8歳の子供を見ながら、もう少ししばらくしたら自分はあのぐらいのことができるようになる、と思い、4歳ぐらいの子供を見て、逆に、しばらく前までは自分はあであった、ああいうこともできなかったというふうに見ますから、いわゆる学校で言う予習復習をしながら育てていきます。しかし、今の子供は同年齢集団と、大人しか見ていないわけですから、急速に大人になることが要求されているということがはっきりしております。予習復習なしで、いきなり大人になれと言われているわけですから、非常に乱暴に育てているという言い方ができると思います。

いったい、日本の社会は、私が育った頃のような伝統的な育て方というものを、いったん消しているのではないか、という気がします。消してしまいましたから、多くの親御さんを含めて、どうしていいかわからない、という状況になっているのではないかと。いつから始まったかというのを反省してみますと、非常に簡単で、たぶん明治維新だと思います。明治維新以降、我々は、私の表現ですと、「子育ての自転車操業」というのを始めた。どういうことかという、親が、自分が育ったようには子供を育てない、すると親と子供の間で、話し合いが出来なくなります。

例えば、私と私の子供では、全く違います。私が子供の頃にはテレビがないし、いわゆる食糧難でございますし、戦争中ですからほとんどの自分のことは体でやっていましたが、私の子供の世代になりますと、冷蔵庫を開ければ食べ物があって、移動するには車があって、テレビ

があっとうんぬんですから、これは全く違う生活になってしまったんです。家の造りそのものをいっても、180度違ってしまいました。

そういうことをやるについて、子供のことを考えたか、と私は申し上げたい。テレビが徹底的に普及しまして、NHKの調査では多い子供ですと1日6時間、見ていると言っています。そうしたら、子供が6時間テレビを見たときに、脳の発育にどういう影響があるかということを経験者が調べたか、と。それで私はNHKにも提案しまして、2年前から、放送文化研究所でテレビが子供の脳に与える影響という調査を、やっとな始めました。どういうことをするかというと、その年、0歳であった子供を、例えば100人なら100人選びまして、ずっとフォローします。丁寧に、どういうテレビをどれだけ見てた、ということを経験者の子についてきちんと記録していきます。それを10年20年続けると、その子が中学生になり、高校生になり、最終的には大人になっていきますが、そうすると、様々な達成度が見られるわけです。つまり、例えば高校生になれば成績どれぐらいだとか、どういう性格だとか、対人関係がどうだとか、あるいは極端な場合、反社会的行動があるかないかとか、そういうことが出てまいります。何百人もきちんと調べていけば、その最終的に出てきた結果と、テレビをどういうふうに見ていたかという調査を統計的に関連させることが出来ますから、そうしますと、初めてテレビの影響ということが見えてくるはずであります。

教育に関するすべての議論において、そういった縦断的な息の長い研究を、当然やらなければいけない。今申し上げたテレビの例でいま

すと、テレビが子供にどういう影響を与えるかというようなことは、テレビ放送が始まって、家庭で当然子供が見るな、というようなことがわかった段階で、テレビ関係の業界は、もう始めからやってなければいけなかったことです。

今、ゲーム脳、ということが言われていますが、これも全く同じで、いつも業界の方には、そういう研究を早く始めなさい、と言っております。つまり、子供がどんなゲームを1日にどのくらいやるのか、統計をきちんと取る。そうして10年20年待たなければ、それがどういう影響を与えたか、ということは実証的にはわからない、と申し上げます。こういうのは非常に息が長くて、皆さん嫌います。ご存じのように、現代社会はある意味で能力主義といわれます。成果主義ですから、研究でしたら、そういう研究は始めてから10年20年たないと、わずかな結果も出ませんし、評価されませんから、従って当然ですが、こういうことは国がやらなければいけないことです。

それを手を抜いてきた、と私は思います。それをやりませんと客観的には何も言えない、ということでもあります。それでテレビが子供にどういう影響を与えるかと、現在、皆さんが想像でものを言っても、だいたい当たっているのか当たっていないのか全く分からないわけです。証拠がないわけですから。つまり、理科的な考え方を、もう少しそういうところに、きちんと入れていただかないと、訳のわからない議論をして喧嘩しなければならぬということになる。

教育自体は誰でも受けてくるわけですから、一応皆さん、一意見あるわけです。それに、科学的・客観的な根拠をつけるためには、今申し

上げたような長い目で見た、縦断的な調査をするしかない、というのが、私の長い間の意見であります。そういう仕事は、公共的にやるしかない。そのためには、皆さん方が、まずそれをご理解してくださらないといけない。そういうことであります。そうすれば初めて、これからの社会とか、これからの教育を、客観的に議論できるというふうに、私は思っているわけです。

基本的ないわゆるインフラの整備ということを最近、よく新聞で目にされると思います。例えばイラクの援助、特に水道と言いますが、それは当然のことです。そこをちゃんとすると、体に関しては他のことがどうでもよくなってまいります。多くの方が、そうでなくて、例えば車が普及したとか、冷蔵庫とかそういうことについて目を奪われるのですが、実は最も重要だったのは、水道の整備と、水道水の確保であります。教育もおそらくは全く同じで、インフラの整備ということは必要で、何が必要かということとは、そういう長い統計を見ないと分からない、ということをお願いしたかった。



それで、次に自転車操業という話ですが、例えば明治維新ですと、福沢諭吉は封建制度は親の敵、と言うわけです。それはよく分かるのですが、封建制度は親の敵で、封建制度がつぶれてしまいますと、福沢さんの息子さんというのは、どういうふうに考えて育つんだろうな、と思うわけです。つまり、親が一生懸命にやって、一生かけた仕事というのは、子供の代にはなくなってしまうのです。私がそういうことを気にするのは、実は私自身の体験があるからです。

20年近く前だと思えます。自分は学校も出て

なくて、非常に成功した人が、「お金が無くて学校行けない若い人のために奨学金を作る。」ということ言われて、それが新聞の記事になった。朝、新聞を読みながら、私は思わず「なんでそんなことをすんだよ！」と言ってしまったんです。「高等教育を受けないで、自分はここまで来た。お前らもこうやれ。」とどうして言わないんだろうな、と思ったんです。

「私が子供の頃、こう育った、だからお前もこう育て。」と言えるのが、本来の子育てだろうと、私は思うんです。それを、「自分は貧しくて高等教育を受けることが出来なかった。だから、若い人は高等教育を受けなさい。」というのは、これはどこまで本当かということに疑ったわけです。ご本人がどこまで本気か、と。別な言い方をしますと、自分がそういう高等教育を受けないで、それでも社会でこれだけ成功したと、若い人に、「じゃあ、俺と同じようにやれ。」と言うのか、それとも「学校行け。」と言うのか、それはつまり、ある見方をしますと、ご本人が自分の過去を肯定しているのか、否定しているのか、という問題です。

私は、基本的に自分の過去を肯定するというたちであります。それは、古い言葉で、「我ことにおいて後悔せず」と言いますが、何かやってしまったときに、それについてもう後悔しないと。これはどういう意味か、私流に解釈いたしますと、やってしまったことを元に戻すことはできません。そんなことは誰でも分かっているわけです。それならば、やってしまったことについて、そのやってしまったことが、将来において、あれはよかった、というふうに、残りの人生を運営していくというか、動かしていくし

かないわけです。決まってしまった結果が最良になるように行動するというのが、当然のことだと思うんです。それが、つまり、後悔しない、という意味であります。そうしますと、教育を受けないで社会で成功していったときに、じゃあ、自分自身の人生を肯定するのであれば、「お前らも俺と同じようにやれ。」とどうして言わないんだろうな、と私は思ったんです。

それで、論点がある程度おわかりいただけると思いますが、私自身も小学校2年で終戦で、世の中がそれ以来、ガラッと変わったわけです。この話を時々申し上げるんですが、面白いのは、私前後の世代というのは、結構複雑なんです。ちょっと年齢が違いますと、戦争に対する反応が違います。「昭和20年8月15日に、戦争に負けたわけだが、それ聞いてどう思った？」という質問を、同年配ぐらいの人にします。私ですと小学校2年生で、母の実家に疎開しておりました。8月15日に、そこにいた伯母が「戦争に負けたらしいよ。」と一言教えてくれた。その時の私の反応は、極めてよく覚えておりました、「だまされた」と思った。「だまされた」とは新聞であれ、ラジオであれ、大人であれ、みんな「この戦争勝つ。」とずっと言ってきたわけですから。それで初めて「負けたらしいよ。」と言ってもらって、「あっ、だまされた」と素直に思いました。ですから、それはその後非常に大きな影響があったと思います。

同年配で少し上の人、昭和20年8月15日に、小学校の上級から中学ぐらいだった人に、「8月15日、どう思った？」と聞くと、違う返事返ってきます。「助かったと思った。」と返事が返ってくる。もうちょっと上になるとどうか。私は

だまされた世代、その上は助かった世代ですが、その少し上は何かというと、自分の頭を整理する世代です。なぜなら、私が教わった先生も軍隊から帰ってまいりましたから、つまり、戦前がそれこそ〈愛国〉であって、戦後が〈民主〉ですから、自分の頭を整理するので精一杯という世代がそれより上であります。その世代が戦争についていろんなことを言ったらしいのですが、私は一切聞いていない。なぜ聞いていないかということ、私が小学生ぐらいだったときの暗黙の教育は、男の子は喧嘩に負けて帰ってきてグズグズ言うんじゃない、という教育です。本当に悔しいと思ったら、何か一生懸命やって、後で勝って帰ってこいというそういうやつでした。ですから黙っていたんです。だからそれについて、グズグズ言ったのは一部の人だと思います。では、黙っていた人は何をしたのか、と。それをちょっと次に申し上げたいと思います。

私は医学部を出まして解剖に入りました。「何で医学部出て解剖やったんですか。」と、今まで何度聞かれたかわかりません。普通は臨床のお医者さんになるんです。基礎やる人は1クラス1割いないです。私のクラスだけ実は1割いたので、変なクラスなんです。それは実は、ある意味で当然です。なぜなら、私のクラスは今言ったように、だまされた世代だからであります。どういうことかということ、子供の時にそういう体験をしますと、いろんなことを信用しないんです。じゃあ、世の中で確実なものは何だと思うわけです。問題はそこなんです。確実なものというのはどういう意味かということ、世界中どこへ行っても変わらないし、時代が変わっても、変わらないものはなんだ、ということ暗黙の

うちに頼ろうとする、そういうことを探そうとする。その上に戦争の反省があります。戦争の反省とはどういうことかということ、物量に負けたと言ったんです。物量に負けたということは、当然のことを無視したからでしょう。

「変わらないことを。」「物量に負けた。」その2つが結合したら何になったか。ソニー、ホンダ、松下になりました。文化系の方は、戦後の日本を背負ってきたのは日本経済で、それを代表しているのは、ソニー、ホンダ、松下、つまりもの作りだと、今でも言います。なぜ、計算機作ったり、ブルドーザー作ったり、ああいうことを命がけで大勢の技術者がやったのですか。例えば盛田昭夫とか、本田宗一郎とか、松下幸之助、個人がやったものではありません。あれだけの大きな会社を作って、あれだけのものを世界中に売るについては、ほとんど命がけでやっていた技術者がたくさんいたわけですから。それはなぜかと言ったら、私から見ると極めて当たり前です。

つまり私が解剖に入ったのと同じ理由です。日本でちゃんと走る車は、どこへ持って行ってもちゃんと走ります。日本でちゃんと計算できる計算機は、世界中どこへ持って行ってもできます。つまり変わらない、普遍なのです。そうして、それを無視したから逆に言えば戦争に負けたんです。ですから、戦後の日本のもの作りというのは、ある面では、戦争の反省でもあり、戦争の継続でもあるわけです。今度はちゃんとやろう、という気持ちを強く見るならば、戦争の続きですし、あそこで負けたんだ、というのを強く見るならば、戦争の反省であります。戦後の日本の経済発展ということが、戦争と裏返

しになっているということは、皆さんも何となくお気づきだったはずであります。それは言葉で言うことではなくて、命がけでやることだったんです。

私が解剖に入ったのも、ほとんど全く同じ理由です。つまり、私は解剖の教室に入ろうと思ったときに、昭和20年卒業の、当時としては非常に若い教授が二人おられた。そのお一人が、私が教室に入った後、言われたことがあるんです。ああいう時代に自分は学校を卒業して、専攻は何にしようかと思って考えたんだと。やっぱり、医学の中で最も確実な学問とは何だ、ということを考えて。それで考えたあげく、それは解剖だ、という結論になって、私は解剖をやったんですよ、と、言われたのを今でもよく覚えています。それを覚えているということは、私自身もそれに共鳴していたということですよ。

解剖が確実な学問というのは皆さんピンとこないと思いますが、ある意味で非常に確実な学問です。素直に見て、「こうなってるでしょ。」と言うと、これはもうどうしようもないというもののなんです。まず、その強さです。もう一つは、もちろんホルマリンで固定して、例えば学生実習ですと、3ヶ月毎日やります。ずっと解剖していきますと、ちゃんとした身体が、いわば見るも無惨になっているわけです。「何でこんなことになった。」と言うと、答えが即座に返ってきます。「やったのは、お前だろ。」という言葉が。私がやった分だけがいつも目の前にあります。これは結構厳しいことです。すべては自分がやったこと。その結果を背負い込むしかない世界であります。それが、戦争で、ああやって価値がひっくり返った社会の中を生きていく私ども

にとっては非常に安心というか、確実というふうに思えました。それと同じ気持ち、似たような気持ちを持った人がたくさんいたと思います。それが何になったか。さっき申し上げたように、ソニー、ホンダ、松下になったと思います。

何を追いかけたかと言えば、どこへ持って行っても変わらないもの。時間がたっても変わらないもの。それを昔は何と言ったかという、「真理」と言ったのです。不変かつ普遍なもの。変わらず、あまねく、成り立つもの。真理を追究するという、つまりそういう気持ちなんです。

おわかりいただきましたことは、社会が変動したときに若い人がどういう気持ちになるかという一つの例なんです。私が戦争の影響で、ある意味で真理を追究すると大袈裟なことを言いましたけども、変わらないものを追いかけたという、それは何も私に限らない、とすぐわかった。どういう意味かという、百年前も同じではないか、とすぐに思います。何かというと明治維新であります。皆さん方が明治維新といったら、軍事と政治になってしまいますが、それは違う。それは違うというのは、言説として扱っていくと政治になり軍事になり、そうですね、西郷隆盛になったり木戸孝允になったり、大久保になったりうんぬん、とこういきます。そこに黙っていた人はいっぱいいます。それが、明治が生み出した、おびただしい数の科学者、技術者であります。

私はこのところ8年間、北里大学行っておりますが、ご存じのように、北里柴三郎を記念して名前が付けられております。北里さんという人は、熊本のとんでもない田舎から出た人です。あの時代に熊本の田舎で育って、ベ

ルリンに行って、今で言えばノーベル賞クラスの仕事をしています。考えてください。幕末に育って、それでベルリン行って、なんでそんな仕事ができるんだと。こちらの土地で言えば、野口英世がそうですね。おそらく私は、その人達も私に非常に似た考えを持ったいたのではないかと思う。なぜかと言ったら、江戸300年、仁義礼智信でやってきて、それが、いわばほとんど一夜にしてひっくり返るわけです。頭の上で勝手に山が変わっていくわけです。ガラガラガラガラ。それこそ音を立てて変わっていくという感じだったと思います。そうしたら、変わらないものは何だと、当然思うと思います。そうしたら北里さんに代わって言うなら、熊本であろうが、ベルリンであろうが、バイ菌にはかわりはない、という話になる。そういう気持ちが暗黙のうちにあるということです。表に出してそう思っていくことではない。それが明治の、日本の科学技術の発展を支えたのだらう、と私は思います。ですから、アジアの国では非常に珍しく、日本は近代科学をサッと取り入れます。いろんな土壌があったことは間違いない。他にもいろいろ理由があったと思いますが、私が今言っているのは、ある意味ではかなり表面的な、ですが、ある意味では非常に大きな理由だろうと思います。ですから、明治維新で日本は、非常に科学技術を発展させます。

だから、翻って現在の日本を見たときに、そういう気持ちがあるかということをおもいます。真理の追究なんて言うと、極めて嘘くさいから死んでしまったわけですが、そういうものは、実は無意識に追究される問題ではないかという気がします。無意識というのは、やはり、何ら

かの意味で環境から与えられる。ですから今の若い人に、真理の追究と言っても、寝言にしか聞こえないのではないかと。でも、私はそうではないと思います。そういうものは、絶えず繰り返し、人の社会に起こってくることであるので。変わらないもの、普遍的なもの、不変かつ普遍と言いましたけども、別な言葉で言えば、本質と言ったわけで、物事の本質はそういうものをとらえる気持ちというのは、やはり、社会の中には絶対に必要だ、という気がします。さもなければ、その時その時の事情で動いていってしまっ、社会とはどのくらい変わるのか、と言ったら、一億玉砕で、特攻隊まで繰り出した、そこまで頑張っ、なおかつ戦後は、全く逆になる。それくらいに変わるものなのです。「鬼畜米英」が「マッカーサー万歳」になっても、別にそんなことは関係ない。変わらんものは何だと。それを追うのが学問でしょう。

ですから、私が子どもの頃、「正義は勝つ。」とよく言いました。それで戦争には負けたのですが、でもいまだに私はそれでいいのだと思っています。「正義は勝つ。」その通りなのです。正しい方が勝つのです。けれども、問題は何が正しいのかということ、であります。それを追究するのが学問であります。正義と戦争について言うなら、正義は必ず勝つのですから、それを鉄砲に証明してもらわない必要はない、というのが私の本音です。何で自分が正しいと思ったら、鉄砲で証明してもらわなきゃいけないんだと。学問というのは、その代わりにあるものです。本当に正しいのは何だ、というのを考えますから。それならそれを証明するのに鉄砲はいらない、ということは明らかです。それは、今、テ

口でもめていますけども、両側に対して言えることでありまして、自分が正しいということ爆弾で証明する必要はないのです。なぜなら、正義は必ず勝つのですから。逆に言えば、腕力を使うと言うことは、その信念がないということを行っていることでしょう。私はそういうのを本気で学問していない、とこう言うんです。学問というのは、そういう意味では、爆弾突っ込むのと同じで、ある意味では命がけだったわけなんです。

もう一つ、大きな社会的変動を通ったとすれば、それは大学紛争であります。今、ちょうど50代後半にかかろうという方達、いわゆる団塊の世代が大学の学生だった頃に起きた大騒動でありまして、これも教育の中では、大変な大きな問題だったと、私は思っています。ほとんどの方がもう、忘れたふりをしている。でも50代後半といえば、ちょうど働き盛りですから、みなさん、どこか気持ちの中で、それを持っておられる、知っているはずなんです。あの紛争が起こったとき、いわゆる東大の医学部から起こったと言われていまして、その時に私は、なって2年目の助手でしたから、現場におりまして、その中に完全に巻き込まれたわけなんです。ただし、学生でもなければ教授でもない、つまり完全な当事者でありながら、両方から外されているという、極めて変な立場でした。要するにこれも、子どもどものときの戦争と同じです。私と何ら関係もないのに、頭の上から焼夷弾が降ってきて、それで逃げ回っていた、というのと同じで、教授会と学生が大喧嘩をいたしまして、横っちょでこっちがオロオロしているという構図が、全く同じでありまして。それでもいろんなことを

学びました。

そこで、やはり過去と現在の関係で言うなら、あそこでも私が学んだことが一つある。それは戦後、私が助手になるまで、いわば30ですが、暗黙のうちに信じていたことがあるわけです。それは何かと言うと、人間は進歩、社会は進歩していくという、ある種の進歩主義であります。それが紛争で完全に壊れた。

どうして壊れたかと言うと、あのとき騒いだ学生さん達は、基本的に昭和22年から24年生まれです。それを団塊の世代というのですが、その人達が、実は「わっしょい、わっしょい」で、ヘルメット被って、覆面して、ゲバ棒を持って、私の研究室まで来たんです。私はさっき申し上げたように助手になりたてで、自分で研究を始めて本当に最初の頃でしたから、自分の仕事を本気でやっていました。それで部屋から「出ていけ。」と言うんです。その時の理屈が、「俺たちがこんなに一生懸命やっているのに、お前らはなんだ。こんなところで、のうのうと研究なんかしてやがって。」という、それです。これは何か。戦時中の「この非常時に」というやつです。うっかり、口紅つけて、スカートはいて、化粧して歩いたら、「この非常時になんだ。」と言う。「あいつら、戦後生まれで、戦争中のこと何にも知らねえのに、全く同じ雰囲気持ってやんな。」と私はそう思います。それに決定打がきたのが、やがて喧嘩が激しくなりまして、しょっちゅう暴力沙汰になった。そしたら武闘訓練と称して公称三千人という学生集めまして、私はしょうがねえ、と見ていたわけです。そしたら全員が竹槍を持っていたんです。「こりゃいけねえ、何でこいつら竹槍持ち出すんだ。なんで、こうい

うものが帰ってくるんだろう。」つまり、その時初めて、自分で気が付いたのは、非国民とか、一億玉砕とか、ああいう雰囲気というのは、世の中が進歩していけば、いずれなくなっていくもんだと、どこかで思っていた。それで、あれが私に教えた教訓の一番大きなものは、「そんなものは、なくならん。事情によっては、必ずまた生き返って帰ってくる。」という、これがわかりました。つまりそこで私は、進歩主義者から、転換したわけでありませぬ。



そういった時代の背景ということ、とにかく教育は考えざるを得ませぬ。先ほど言いかけたんですが、自転車操業を我々やってきたのではないかと。そろそろ、それは止めたらいいのではないかと。思うわけです。つまり、江戸時代じゃないんですが、次々に子供は親が育ったように育つ。それが私は実はまともな世界だと思っております。

だいたい、子供は動物ですから、一定の手順を踏んで必ず育ってくるわけで、その手順を全部きちんと踏ませなければ、まともに育つわけはありません。そんなことは、脳研究の結果でもよくわかっていて、臨界期というのがあって、その時、適当な刺激が入らなければ、脳みそはだめだというのはわかり切った話です。そんなことは考えなくても、自然にやっていたわけです。ここまで子供のこと考えない社会を作ってくると、そういうことはすっ飛ばっちゃうんです。やっぱり、親は面倒くさければ、静かだ、という理由で、赤ん坊をテレビの前に置いて、見させておく。最近、小児科医が「2歳以下の子どもに、あんまりテレビ見せるな。」と言っています。

ですが、そんなことは、当たり前です。見せるものにも、置かなければいいんですから。そういうときに、「じゃ、テレビ見せたら、どういふ影響あるんですか。」と、誰も調べていない。それは皆さん方が決めればいい話であって、つまり社会に、子供に、少なくとも影響のあるような様々なものを導入するのであれば、20年なら20年の、観察期間をちゃんと持って、それが子供にどういふ影響を与えるかを客観的に調べるということと同時にやらない限り、社会に導入してはいけない、というふうなルールを作るべきなんです。

家の建て方を変えたり、テレビを入れたり、車を入れたりするときに、最初からやらなければいけなかったことです。後知恵でしょうがないのですが、これから先はそうすべきだろうと、私は思います。いくらでも新しい技術の成果は、これから入ってくるはずですから。そういうものが入ってきたときに、それを社会に入れてはいけない、とは言いません。入れるのであれば、入れようと思う人は、それが社会に対してどういふ影響があったか、特に子供に対してどういふ影響を与えるかということは、アセスをしなければいけない。そんなことは当たり前じゃないですか。今、工事するときだってアセスするんです。その工事が環境に対してどういふ影響を与えるのかと。それだったら、家庭の中に入ってきて、誰でも使ってしまうようなものについては、当然ながら、人間という自然に対するアセスが必要に決まっているわけなんです。それを本気でやってこなかったから、教育の先生が、困っているわけでしょう。「何で子供達は、こうなっちゃうんだ。」と。

私は、理事長として保育園の面倒見ているのですが、ここ2、3年、卒園式が、今までと違うんです。要するに、いわゆる多動性症候群で、落ち着かないんです。じっと座ってられない子供が、普通になっています。それで、例えば、子供は躰の一つとして「座って食べなさい。」ということ、きつくやっているんですが、そうするとお母さんが文句を言うんです。「躰が厳しすぎる。」と。いったい、家でどうやってものを食べているんだろう、と思います。

一番面白かったのは、給食だけでは、ということで、月に1回、お弁当の日を作りました。その日は、子供全員が、お母さんの作った、違うものを食べるんです。それが、役所から指導がきて、2ヶ月に1回にせよ、と言うんです。頭にきて、僕はぎゃあぎゃあ怒ったんですけど、怒ったってしょうがない。「給食するんだから、全部給食するのが当然だろ。」という意見が役所に行くんです。だから役所は困って、こっちの主張と向こうの主張を足して2で割ったら、「2ヶ月に1回にしる。」

僕はこういうのを本気でない、と言うんです。保育園と親は、そういうところでは必ず喧嘩しなきゃいけない、という意見です。それは学校も同じでしょう。子供を預けているんですから。しかし、親の役割は何で、学校の役割は何だということが、決まっているわけではないんです。例えば、徹底的に理想的な保育園が仮にできたとしたら、親はいらないか、ということです。そしたら、親と保育園は、必ず、子どものために絶えずぶつかり合っていなければいけないものなんです。「そんなこと言うけど、それは親の仕事でしょ。」とか、「保育園、ここまで面倒

見てあたりまえじゃないか。」とか、それはしょっちゅうやっていいことなんです。学校だって私は同じだと思います。でも、おそらくそれはやっていないでしょう。「面倒くせえ。」それは結局は、私は子供を本気で見ていない、ということに通じているのではないかと思います。本気で見ていないから、と言うしかないです。だから足して2で割るわけです。あっちで文句言うし、こっちで文句言うから、それは行政としては足して2で割ります。

結局それをまとめて言うと、教育の問題は、「どこまで本気か」という一言に尽きるんですね。本気でやろうと思ったら、えらい大変なことです。本気になったら、きりが無いというのがあります。そういう時のバックボーンですね、こういうイデオロギーを徹底的に消してきた社会で、果たして教育が成り立つのか、私は思うわけです。これは根本的には、最初に申し上げたように、「変わらないものは何だ。」それで「正義は勝つ。」と申し上げた。それで「鉄砲に証明してもら必要はない。」今の私はそういうことでも言うしかないです。

初めて出会う山野草に心ときめかす

加藤山野草園

加藤 ハルイ氏に聞く

土湯堤ヶ平の姫サユリ群生地近くに、加藤山野草園があります。春蝉が鳴く中、福島弁の温かい、加藤ハルイさんにお話を伺いました。

■野草園を始めたきっかけは・・・

もともと山野草が好きで、高原大根などの野菜を作る合間に育てていました。あちこち歩いて、野草や山菜の勉強をしたり、買い求めたりしました。「ここに来ると心が和む。」という知人の勧めもあって山野草園を始めました。人を喜ばせたり笑わせたりするのは得意なんです。山の中でじっとしてたら、何の出会いもない。人にもいいこと。自分にもいいことです。

■仕事を支えてきたものは・・・

人と人の和です。ここはふれあいの場所です。友達がいっぱいできます。

ある時は、旅行の途中に立ち寄った奥さんに聞いて、その翌日、わざわざ雨の中訪ねてくれた人がいます。狛鼻溪観光の功労者・佐藤猯巖の子孫であるその人は、その後、自分でまとめた本を送ってくれました。「泊まりに来るときは、宿を取りますから。」と、初めて来てくれた人が言ってくれたことを、とても嬉しく思いました。

この間は、東京から来た人が、白と黄色のカタクリを見て譲ってほしいと言ったのです。でも、4、5本しか咲いてないからいたましくて譲れない。それで、傍らに出ていた苗をあげることにしました。「くれてやっから、生かしてちょうだい。」生かそうとする意気込みがあるのだ

から、それを大切にしたいと思いました。

ここでは、お客さん同士の出会いもあります。花の話で花が咲いて、そこからいろんな交流が生まれます。普通に商売しては、こういうわけにはいかない。花を売って終わり。ここだから、自然の中で、あんまりかしこまってないからできることかもしれません。



花を売ってどうこうではなく、誰が来ても「きれいだな」と言ってもらえれば、それで満足です。人とのつきあいが楽しい。だから、長生きしないとならないと思います。長生きしないとみんなにいきあわないから。

■伝えたいことは・・・

ここに来る人を見ていると、勉強になります。人前でどんなことばを吐くか。そこに人柄が出てきますね。人にははいけないな、見下した言い方をしてはいけないなと思うことがあります。人を責めるより先に、自分はどうかと考えます。

植物を育てるのも、人間を育てるのも一緒です。植物だって、悪口を言うと枯れてしまいます。花が咲いたら、ほめてやる。根っこがどうなってるか、いつも見てやる。水ばかりやって、甘やかすとだめになってきます。かわいいかわいいと過保護にしていると腐ってくる。常に強く生かしてやるのが大事だと思います。

美術教育の今 現在

パリ～福島～東京

教科教育チーム 片 平 仁

3月にパリを数年ぶりに訪れた。2人の教え子が春休みを利用して旅行に行くというので、美術館のガイド役を買って出たのである。絵画を専門に学ぶ17歳の彼らには、パリは余りに眩しすぎるのでは、と当初懸念したが、宝の山の作品群の中に目的の作品を探し出しそれらに挑んでいく彼らの姿は逞しささえ感じるほどであった。

美術館で豪華な情報の洪水にさらされた頭は3時間もすると悲鳴を上げ始める。私たちは散歩をかねてカルチェ・ラタン（学生街）に出かけた。コレージュ・ド・フランスの近く（学生街のど真ん中）、サン・ミッシェル通りの交差点の角に、アニメのフィギュア屋ができていた。中に入ると日本のマンガのコーナーがある。ページをめくると台詞がフランス語に直されている。芸用解剖学の本を求めに学生街の本屋に行くと、そこにもマンガのコーナーが……。そういえば、さっきメトロの中でジャンプコミックス（集英社のマンガ単行本）を読んでいる当地の学生らしき人を見かけたっけ……。

パリに出かけると、いつもながら文化行政の分厚さには溜め息がもれる。例えば、ルーブル美術館の入場料は900円程度で入場日に限り出入り自由、18歳以下の学生無料（国際学生証を持っていれば国籍にかかわらず無料）、国際教員証があれば教員も無料、写真撮影はストロボと三脚のみ禁止で原則自由、鑑賞支援プログラムがあり美術館の中では子どもたちが教師とともに大

作の前に座り学芸員の講義を聞いているなど、枚挙に暇がない。それらの制度を支える下地は、芸術を人間の文化の中心として捉え、それを学ぶことが人間であることだと考える伝統的良識である。

翻って我が国に目を転じれば、芸術教育すら片隅に追いやられつつある極めて貧しい状況に陥っている。教育の現場では「進学指導重視」という旗の下、堂々と芸術の単位の切り捨て、芸術担当教諭の減員が行われている。「生きる力」を育てるために生み出された「ゆとり」のために、本来「生きる力」を醸成するために最も適した芸術の時間が削減されているのである。

土曜日の午前中、上野公園に行くと、フィールド・ワークにきた中高校生の集団によく出会う。よく見るとワークシートを持ち、引率の教員らしき人物からチケットを受け取り美術館の中に入って行く。なるほど、芸術教育は学校という枠を離れ社会の中で実施されるべきなのかもしれない。しかし、それが現実にはできるのは芸術に職業人として携わる人が多く住み、活気のあるアートシーンがそこにあり、かつ充実したプログラムを有する公共施設が身近にあるという条件が整っている都会での話である。それ以外では、やはり学校教育の果たすべき役割は非常に大きいのではないのだろうか。私たちは「生きる力」という窓からもう一度芸術教育について考えるべきなのではないだろうか。

I 研究の趣旨

多発している少年犯罪の現況は、非行がどの子どもにも起こりうる可能性があることを示している。この現状認識に立って、少年犯罪に関する社会問題は、道徳の授業において取り扱うべき緊急課題的内容であると考えた。

そこで、道徳的価値について問題意識や課題意識を抱きながら取り組む学習を総合的な学習の時間を通して意図的に展開した後に、道徳の時間において道徳的価値の自覚を深める学習を行うことにより、児童は各自の道徳的な問題や課題をより主体的に追求するのではないかと考え、以下の仮説を設定した。

ITを活用して判断材料となる情報を主体的に選択する機会を設定し、情報交換や情報発信をめあてに得られた情報をまとめていけば、自分の考えを構築することができるようになるであろう。

II 研究の概要

- 1 学習ガイダンスと情報収集
効果的な情報検索
- 2 情報の整理の方法
「こんな事実・考えあったよシート」の活用
- 3 情報発信の方法
道徳新聞の作成
- 4 情報交換の方法

付箋紙の使用

- 5 学習のまとめとしての情報発信

III 成果と今後の課題

- 1 総合単元的な道徳の時間の学習を生かした指導の工夫について

【成果】

- 総合的な学習の時間を活用し課題に向き合うことで、道徳の時間を補完する活動を組むことができ、学習に幅を持たせることができた。
- 児童は、情報の収集－情報の発信－話し合い－まとめ－情報の発信という一連の活動を通して、自分の考えを構築し深めていくことができた。道徳感想シートの中にも、「人それぞれ、少年犯罪についてのとらえ方が違うことに納得できた」など、学習の過程を自己評価しながら進めることができた。

【課題】

- 多発する少年犯罪に児童が巻き込まれないよう、緊急課題として考える機会を設定したいと考え、ITを活用した授業を構想したが、少年犯罪という大きな枠組みを資料としたため、どのような授業展開にするか見通すことが難しかった。
- 少年犯罪の原因を絞ることが難しいため、焦点化することが難しかった。また、規律ある行動をしようとする心情を育てることをねらったが、耐性に目が向く児童もおり、方向付けするための発問を工夫する必要があると

感じた。

道徳教育について家庭への啓発が図られたと思われる。

2 家庭や地域との連携について

- 学級通信等では、保護者に児童の様子を知らせるだけで、感想を求めることはないが、今回の学習では、児童への励ましを含めてお願いした。保護者の感想の中には「家庭で話し合う機会が増えた」、「自らの行動を振り返るきっかけとなった」といった文面も見られ、

【課題】

- 「心のノート」を活用しているが、道徳の授業の中だけでなく、保護者に一緒に考えてもらうための活用方法をさらに検討していきたい。今回の授業のように、児童がまとめたものを読んでもらい、一緒に考える機会をつくってもらうよう一層働きかけていきたい。

授業実践モデル

- 1 小学校6年
 2 総合的な学習「少年Aについて考えよう」
 3 単元目標
 ○自由の大切さを理解し、規律ある行動をしようとする心情を育てる
 4 単元計画
 (1)少年犯罪に対する社会の動きや過去における少年犯罪を調べ、情報を収集する。・・・1時間
 (2)収集した情報から考えられることを意見としてまとめる。・・・1時間
 (3)道徳新聞を作成し、友達に情報を発信し、紙上での意見交流を行う。・・・1時間
 (4)友達と意見の交流を行い、考えを深める。・・・1時間
 (5)保護者や先生に自分の考えを発信し、感想を求める。・・・1時間

国見町立大木戸小学校 吉田 聡

指導計画	児童・生徒の活動	指導上の留意点
1時間	1 インターネットで少年犯罪について調べ、情報を集める。(※IT活用)	○少年犯罪の新聞記事を提示し、社会現象についての関心を高める。提示した以外にも少年犯罪がないかどうか投げかける。 【クリップビデオ】 ○少年犯罪の事実や少年犯罪に対する周囲の考え・意見を収集させる。【クリップビデオ】
1時間	2 「こんな考えあったよシート」に発信したことを整理する。(※IT活用)	○情報をうのみにせず、自分の考えと違う情報に触れたときに、「こんな考えあったよシート」に記入させ、自分の考えとどこが違うのかはつきりさせるようにする。 ○インターネット上の出典・URLを明らかにさせ、情報の共有に役立たせる。 ○多くの少年犯罪があることを知り、どうしてこのような事件が起こるのか疑問を持たせるように投げかける。
1時間	3 前時までに得られた情報から、「道徳新聞」を作成する。(※IT活用) 4 自分なりの情報を発信し、周囲の児童の考えを集める。	○「こんな考えあったよシート」をもとに道徳新聞を作成することを通して、情報を整理させる。 【クリップビデオ】 ○短時間で整理できるよう道徳新聞サンプルを提示し、作成のイメージを持たせる。 ○友達の道徳新聞を読み、自分の感じたことを付箋紙に書いて貼り付けるように指示する。 ○友達の考えのよさを認めさせるとともに、自分の考えとの違いを明らかにしながら、意見をしっかり持てるよう投げかける。
1時間	5 「近頃の少年犯罪についてどう思うか」ということについて意見を交流し合う。 ○自分はどう思うか。 ○友達はどうな考えか。 ○違いは何か。 ○どんな感想を持ったか。 6 感想シートに授業での感想をまとめる。	○前時までに作成した「こんな考えあったよシート」、道徳新聞、付箋紙などから、観点に沿って意見を交流させる。 【クリップビデオ】 ①意見交流1 ②意見交流2 ③意見交流3 ④意見交流4 ○教師は、児童と反対の立場になって意見交流に参加し、児童の考えを深められるようにする。 ○授業を振り返り、自分の感想や考えを書かせる。
1時間	7 保護者や先生に自分の考えを発信し、学習のまとめをする。(※IT活用)	○自分の両親やお世話になった先生に電子メール等で学習したことや自分の考えの変容がわかるように発信させる。【クリップビデオ】 ○事前に保護者や先生にはメールが届く旨を知らせて、児童への励ましをお願いしておく。



- 5 IT活用の目標
 ○ITを活用した活動を通して意欲を持って調べ、様々な考えの中から自分の判断材料となる情報を主体的に選択し、考えを構築できるようにする。
 ○情報を、インターネットを利用して効率的に検索できるようにする。
 ○新聞等の作成に当たっては、利用素材の出典を明らかにして自分の考えを書く態度を養う。
 6 活用コンテンツ
 ○各新聞社サイト

左記、授業実践モデルについては教育センターWebページで公開しています。
<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/jissenmodel/top.html>

様々な学校で活用できる 電気伝導性確認装置の製作と活用

教科教育チーム 森下 陽一郎

1 はじめに

電気伝導性を確認する装置の製作は今までも行われているが¹⁾、光や音で電気の流れを確認する装置が多い。ここでは、これまでの装置を改良し、近年携帯電話に利用されている振動モーターを用いて、電気伝導性を触覚（肌）を通して認識する装置の製作を行った。触覚を用いることで視覚や聴覚にとらわれない活用が可能となり、様々な学校での活用が期待できる。

以下に電気伝導性確認装置（自作した装置を「振伝くん」と名付けた。）の製作方法とその活用についてまとめたので報告する。

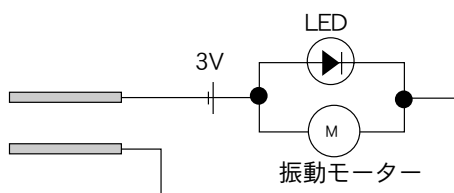
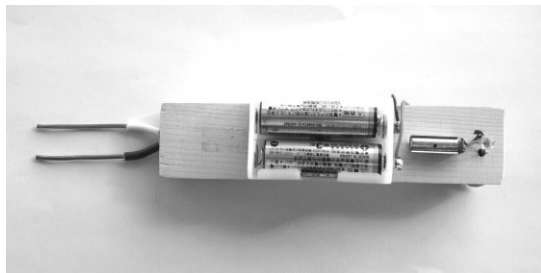


図1 振動モーターを用いた電気伝導性確認装置「振伝くん」

2 製作

2.1 準備

[材料]

Fケーブル（屋内用 16 または 20mm）、木片（150×30×12mm）、リード線、振動モーター※1、発光ダイオード※2、電池、電池ホルダー、木

ねじ、収縮チューブ

[道具]

はんだごて、はんだ、輪ゴム、木工用ボンド、ニッパ、ラジオペンチ、ドライバー、彫刻刀

2.2 方法

- (1) 図2のように、電極になるFケーブルの被覆コードをむく。

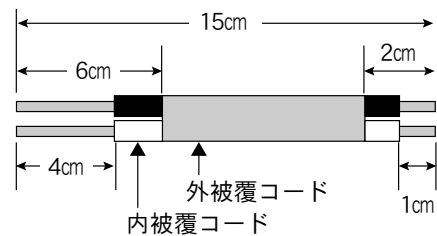


図2 電極(Fケーブル)の製作1

- (2) 図3のように、電極になるFケーブルの銅線間を広げ、反対側の銅線それぞれに、はんだでリード線を取り付ける。
(3) はんだづけした部分を収縮チューブで覆い、絶縁する。

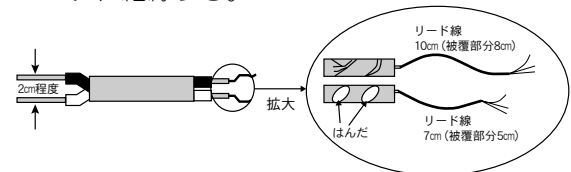


図3 電極(Fケーブル)の製作2

- (4) LED（発光ダイオード）に振動モーターをはんだで取り付ける。

※ LEDと振動モーターには+と-があるので、間違えないように取り付ける。

- (5) 彫刻刀やドリル等を用いて、図4のような装置基板になる木板を準備する。

※ 準備が大変なときは、木板の加工を行わず、電極、電池ホルダー、振動モーター等を木板にのせて固定するだけでも良

い。その他、大きさが異なるうすい板を重ね合わせて溝の部分を作り出す方法などもある。

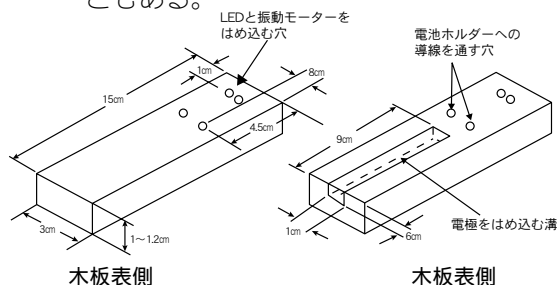


図4 装置基板用木板の製作

(6) 図5のように、装置基板用木板に電極（Fケーブル）、電池ホルダー、LEDと振動モーターを取り付け、リード線で接続する。

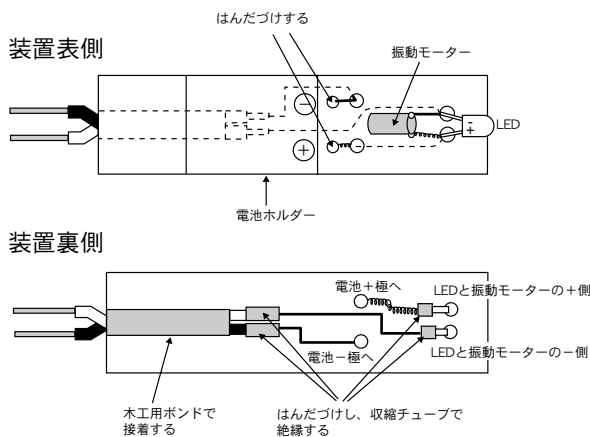


図5 装置の組み立てと完成

3 活用

3.1 小学校での活用

小学校3年の【明かりをつけよう】の単元で、明かりがつくのは電気が流れているからであることを学習した後、「電気を通すものをさがそう」の小単元で「振伝くん」の活用が可能である。ただし、製作にあたっては、前述のような配慮や工夫が必要である。

3.2 中学校での活用

第1分野上の【物質の性質】の単元で、金属かどうかを調べる手段の1つとして、「振伝くん」の活用が可能である。また、発展的学習として、

水溶液の電気分解への応用も可能である。

3.3 高校での活用

理科総合Aの【物質の構成】、【物質の利用】の単元の中で、イオンでできた物質や金属の性質を調べる手段の1つとして、また、化学特の【酸と塩基】、【酸化還元反応】の単元において、水溶液の性質を調べたり、水溶液の電気分解を調べる手段の1つとして、「振伝くん」の活用が可能である。また、本装置の電池を外し回路をつなげば、電池の起電力を調べる簡易装置にもなる¹⁾。なお、楽しむだけの測定にならないように注意し、本来の目的を見失わせないようにする必要がある。

4 まとめ

近年、振動モーターや発光ダイオードなどが身近な製品に利用されるようになり、比較的簡単に手に入るようになった。材料さえ手に入れたら、木材の加工など準備を考慮しても思ったほど時間はかからない。児童、生徒が楽しく興味をもって実験に取り組む姿を想像しながらの準備は、授業の構築にも役立つ。なお、1つ製作するための費用は¥400程度である。本報告は製作例の1つであり、学校や児童、生徒の実態に応じて製作方法の改善や装置の改良を行えば、個人または班単位の製作・実験として行うことが十分可能となる。様々な学校の児童、生徒達が「振伝くん」の振動を肌で感じ、物質の電氣的性質や電流のはたらきについて興味と関心を持つことを期待したい。

参考文献

- 1) 武市壽雄、全国理科教育センター研究協議会編、化学教材の研究、96（1990）、東洋館出版社

※1、2 秋月電子通商より購入
<http://akizukidenshi.com/>



実践に役立つ教育資料

— 最近の研究紀要・資料から —

平成15年度末から平成16年度初めにかけて受け入れた研究紀要や教育資料から、実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

「評価規準および評価方法等の改善と開発に関する研究」

— 学習評価の工夫改善に関する調査研究 —

国立教育政策研究所 (2004年3月)

全国の小・中学校1,250校を対象とした実態調査の結果から浮かび上がった評価に関する課題を「評価規準の工夫改善」「評価方法の工夫改善」「観点別学習状況の評価の観点ごとの総括および評定への総括」「指導と評価の一体化」「評価にかかわる学校運営および連携・支援」の五つに分類、整理し、各都道府県・政令指定都市での実践を基に、それぞれの課題について検討した成果がまとめられています。

信頼される学校文化の形成

— 学校文化を形成する管理職・教職員の意識調査・事例研究・参画研修を通して —

福岡市教育センター (2004年3月)

それぞれの学校がもつ文化をポジティブに変えれば信頼される学校教育のための学校改善を図ることができるであろうという仮説の基に、学校文化をつかむ・読み取る・創るの3段階の過程にそって実践的研究が進められています。

通常の学級の先生へ～自閉症児の支援マニュアル（改訂版）～

独立行政法人 国立特殊教育総合研究所 (2004年3月)

自閉症および高機能自閉症、アスペルガー症候群に関する基本的な障害の特徴と共通する支援内容や対応についての事例を基に、一人一人の自閉症児のオーダーメイド的な支援や対応の工夫が記録用紙も例示して紹介されています。

望ましい人間関係をはぐくむ学級経営の在り方

平成15年度研究紀要No. 196 十勝教育研究所 (2004年3月)

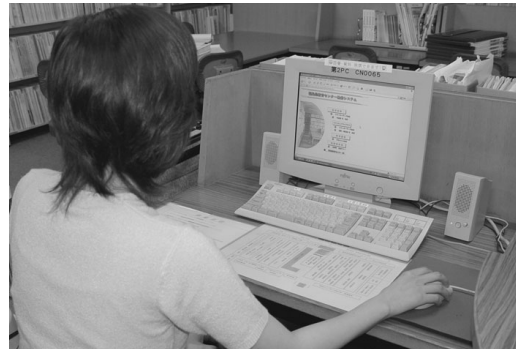
「豊かな人間性」を培うための「望ましい人間関係」を基盤とした学級経営の在り方について、人とのかかわりを重視した道徳の時間での実践的研究がされています。

※ 今後も、実践に役立つ教育資料を紹介してまいります。

教育図書・研究資料のご案内

当センターには、県内外の教育に関する図書、文献、研究資料などがあり、学校または個人の研究などを支援するために、閲覧・貸出を行っています。また、今年5月から福島県教育センター Web で、検索ができるようになりました。どうぞご利用ください。

ここでは、教育図書・研究資料の利用方法などについて紹介します。



福島県教育センター Web 検索システム

<開館>

月～金曜日 9:00～17:00

※ 祝日・年末年始は閉館

<貸出方法>

- 来所による場合：時間外の来所閲覧についてご希望がありましたら、ご相談ください。
- 送付による場合：毎年発行し各学校などに送付している資料目録や福島県教育センター Web の検索システムを活用し、必要な図書・文献・研究資料の検索番号やキーワードを電話・FAXなどでご連絡ください。こちらで準備し発送します。なお、送料は実費負担となります。

<貸出冊数・期間> 1回につき5冊まで、2週間以内

<所蔵図書・研究資料・教育雑誌など> (平成16年6月4日現在)

- 教育関係図書 25,306冊

(教科用図書は含みません)

- 教育研究資料 31,590件

各都道府県教育センターや大学の紀要、研究指定校などの研究物が中心です。

- 教育雑誌など 69種

文部科学時報・初等教育資料・中等教育資料
・教育委員会月報・教職研修・学校運営研究
・指導と評価・道徳教育・日経パソコン・月刊生徒指導・各教科ごとの教育雑誌など

平成16年6月4日現在、平成16年度の各都道府県教育センターや大学の紀要、研究指定校などの研究物を315件受け入れています。所外の先生方には、来所や送付によって、19件・70冊のご利用をいただいています。大変貴重な教育研究資料が収められていますので、校内研修やグループ研究、個人の研修などに一層活用されますようお願いします。

<問合せ先>企画・研究グループ 教育調査チーム TEL 024-553-3141 (内線14)

FAX 024-554-1588